

第拾貳號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文明之母第十二號目次

○文明之母
課体畫美人論
○論説
敢辯論……佐藤定介
○文藝
Why do I love her?……W. W. Martin.
日光に物をる道にて……佐々木信綱
花野見にゆきて……竹屋雅子
四海太平記大納言局條……二十一峯外史
竹取翁物語講義……琴僊女史
○小説
ても淑女……鐵筆將軍
吉野川……鳴立庵主人
劣夫傑女譚……山縣悌三郎
○批評
級長戸風端書……故人 沼田順義
小説叢○北陸婦人教會雜誌○色界の燈
○雜録
伊勢大輔の話(巻首挿畫)……衍遠樓主人
婚姻の時の秋の字○菅公の装束。人丸の装束、業平の装束
○餘興――竿と蓮――うんれや――新考物(懸賞)
○彙報 數十件

本誌は毎月一回(十五日)に發行す
本誌は前金に非れば發送せず
本誌の定價は(府外は郵税を要せず)

		(郵税共)
一冊	金八錢	金拾錢
六冊半年分	金四十五錢	金五十七錢
十二冊壹年分	金八十四錢	金壹圓八錢

本誌の廣告料は(五號活字廿字詰)

一行 前金拾錢　十行以上前金九錢
廿行以上 前金八錢　一頁以上前金六錢

本誌の見本は郵券拾錢を送らるれば呈す
本誌の代金御回送の節は内國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度
郵券代用は一割増
本誌の前金將に相切れんとする時は其巻の宿所姓名を朱書して發送を[illegible]し然るも尚御回送無之節は直に發送を止むべし

版權所有

發行兼編輯人 中村一 東京深川區[illegible]町十三番地
印刷人 小西石造 東京深川區仲町八番地
發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地 生文社

特別大賣捌
東京本郷區元富士町 盛春堂
仝 京橋區三十間堀一丁目 良明堂出張店
仝 神田區佐柄木町 東海堂
仝 京橋區彌左衛門町 巌々堂
埼玉縣鴻巣町 長島本店

大賣捌
東京日本橋區本石町 指金堂
仝 日本橋區小網町 信文堂
埼玉縣越ヶ谷町 協立舍
仝 所澤 成文堂
仝 浦和町 文華堂
仝 熊谷町 近森堂
仝 川越町 水村岩三郎
仙臺國分町 三友社
越中富山 眞田善二郎
仝 大橋甚吾
越後長岡 目黒卜平
仝 松田周平
秋田 本間金之助
神奈川 吉川伊兵衛
名古屋 永樂屋
大坂 松村九兵衛
仝 前川善兵衛
和歌山 平井文助
出雲松江町 盛進堂
熊本 長崎二郎
仝 千反畑 文明堂
群馬前橋 黒崎長三郎

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

伊勢大輔



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

文明之母第十二號

文明之母

明治二十二年十月十五日發兌

○裸体畫美人論

吾人之を聞く、今を距る幾年前なりしか、虎豹は死して皮を留め人は死して名を留む、てふ金言を聞き、大に感激する所あり、乃ち斧を揮ツて彼の有名なる高砂の松を斫り仆せし者ありし、と。蓋其の愚は眞に憐む可きものなり、其の痴は實に悲む可きものなり、近時我が文壇上に於いて西洋裸体の繪畫は眞の美術に合ふものなり、と論じ、恣に裸美人の圖を作りて意氣揚々たるの徒あり。吾人は謂ふ、此の徒もまた彼の高砂の松を斫りし痴漢と其の意思を同うするものに非ざるなきを知らんや、と。

彼の徒の裸美人を稱道するの說、一として足らず、然れども要するに其の立論の基礎大概脆弱にして、他の一吹嘘を待たずして自倒れんとするものなり。故に吾人は今日まで之に向ツて一の咳拂すら爲すを屑しとせざりき。此の頃美術園と稱する雜誌あり、裸美人の說を爲す、之を讀むに頻に其の美を主張するものゝ如し、否頻に其の醜を彌縫するものゝ如し。勿論また一攻擊の價値あるものにあらずと雖、以前に續々現れ出

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

でたる數多の空論に較すれば、幾分か胃てき處なきにあらず。乃ち之を說破するも亦面白からざるにもあらざるべし。

美術園は曰く、

凡そ畫の美なる所以は能く物の性情を寫すにあり。而して能く物の性情を寫さんとすれば獨其の外形を畫くのみならず、又其の精神を畫かざるべからず。人の性情は決して其の顏貌、および手足の摸樣を以て寫し出だし得るものにあらず。裸体の繪畫は獨顏貌と手足の一端とのみを畫かずして、其の全身を顯すが故に、体肢筋肉の摸樣に依りて、委しく其の性情を寫すことを得。云々。

畫の美なる所以は能く物の性情を寫すに在ること勿論なり。而して能く物の性情を寫さんとすれば獨り其の外形を畫くのみならず、又其の精神を畫かざる可からざると又勿論なり。其れ然り、然るが故に美を論ずる者、畫を作すものは、先第一着に其の精神を描くを力めざる可からず、乃ち其の外形を描くを以て第二着の事と爲さゞる可からず。而して所謂裸体畫の如きは頗る外形を描くを以て先一とし、精神を畫くを以て第二と爲すものゝ如くなり。何となれば啻に顏貌のみならず、啻に手足のみならず、尚委しく肢体筋肉の摸樣までも寫さんと欲するものなればなり。其の銳意齷齪外形に趨るや知

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る可きのみ。

斯く頻に外形上のみ趨るゝもせよ、是亦精神を描出するの手段なり、とせんか。吾人は其の体肢筋肉の摸様が果して如何ほどの精神を描出するに足るか、を知らざるなり。且又人の性情は決して其の顔兒、および手足の摸様のみを以て寫し出だし得るものにあらず、との議論に疑ひなき能はざるなり。吾人は實に顔兒手足のみを以て人の性情を描く、敢て難きにあらざるを確信するなり。

假りに一歩を譲りて、顔兒手足のみにては人の性情を描出する能はざるものとせん。然らば之を描出するに於いて裨補するものを他に求めざる可からず。而して之を裨補するものは實に衣服の摸様と、筋肉の狀態とあるのみ。而して之を裨補する大なるものは、兩者の中果して何れなるべきぞ、乃ち衣服の狀態にあるか、將筋肉の摸様に在るか。吾人は躊躇なく斷言せん、衣服の狀態にありと。何を以てか之をいふ。

凡そ人の性情を描出するの手段は文章に於いても繪畫に於いても必一様なるものなり。先文章に就き一人物の性情を外形上より描出せんとすれば第一着に其の顔兒を形容す、乃ち顔色は然々なり、髮毛は然々なり、耳目口鼻は然々なりと。次には必其の衣服を形容む、乃ち上着は然々なり、下着は然々なり、帶帽履物は然々なり、と。是れ時の古

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今を問はず、國の東西と論ぜず、文章たる文章皆かならず然らざるなきなり。吾人已に斯く首として其の顔貌を描き、次に之が裨補として衣服を狀するを見る、未だ曾て一の体肢筋肉の摸様を精寫すると見ざるなり。文章に於いて然り、焉ぞ繪畫に於て然らざるの理あらんや。

衣服の人の性情を現す大なるや言を俟たず、乃ち其の着くる所の衣服を見て、已に其の人の性情如何を卜す可きは誰人も已に知る所なり。然れども彼の肢体筋肉の狀態は如何ほどに人の性情を現すに足るか、乃ち胸の工合は然々なり、乳の工合は然々なり、腹の工合、股の工合、臍の工合は然々なりと、委しく形容し来るも、如何ほどに人の性情を現すに足るか。

且吾人は問ふ可きことあり。其の胸の工合、乳の工合、股の工合、臍の工合にして果して人の性情を現すに足るものならば、如何なる人物をも裸体を以て描く可きなり、然るに裸体畫は獨美人にのみ限りて、英雄豪傑、若くは老爺老媼の肖像に及ばざるは如何。吾人は實に西洋裸體畫に於いて獨美人を見る、時に小兒を見る、未嘗て老爺の裸体畫を見ざるなり、老媼の裸体畫を見ざるなり、英雄豪傑の裸体畫を見ざるなり。

尚吾人は進んで繪畫の理論より裸體畫の非難す可きを說かんとするに當り、繪畫叢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

誌の早くも之を論じたるを見る。其の所説まづ吾人の意見を得たるを以て、吾人は之を引用して止まんと欲す。

繪畫叢誌は曰く、

皎潔なる丹鳥、華麗なる孔雀の愛す可きは羽毛あるが爲なり、若し羽毛を剝脫するときは誰か能く之を愛するものあらんや。人の衣服は禽鳥の羽毛の如く天成にあらずと雖、人は裸体にして生活し得可きものにあらざれば、其の人爲に成れる衣服は、則ち天理に隨ふて製したるものと云ふべし。物を畫くに真を去ること遠ければ美術に於いて甚忌むべきのことなれども、唯其の真のみに拘束せられて偏に裸体を寫し、綴風景を顧みざるが如きは實に同意を表すること能はざるなり。蓋し畫に補景ありて其の趣味を生ずるもの多し、例へば孔雀に牡丹を添ふれば庭階富貴の相を具へ、丹鳥に蘆荻を加ふれば江湖蕭散の意を見るべきが如し、美人は鮮衣を得て以て其の美ます〱揚がるを見るべきなり。

實に然り人は裸体にして生活し得べきものにあらず、とは何人も知る所の定則なり、乃ち此の定則より演繹して數多の推論をなすを得可し、裸体畫の取るに足らざる容易に之を知るを得可し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

然り而して吾人は更に眼を轉じて風俗上より裸体畫を觀察すべきの必要を見る。西洋に於いては成程古来裸体の圖畫を作るものあり、乃ち裸体の圖畫は繪畫中の一体を爲せるものなり。然るに我が國に於くは春画、若しくは相撲繪の外之を作すものあらざるなり、勿論之と繪画中の一体となさゞるなり。其れ然り、然るが故に西洋に於いては裸体画は常のものなり、西洋人の目に於いては裸体画は異しく觀えざるなり。然れども日本に於いては裸体画は常乃ものにあらざるなり、故に日本人の目に於いては裸体画は異しく見らるゝなり。若し夫れ美人の豊々たる乳房、滿々たる股肉、精細に描き、緻密に寫し来らば、壯少年は之を見て果して如何なる感覺を起す可きか。

嗚呼裸体画を以て眞に趣味に富めるものとし、美術の神髓を得たるものとするも、我が國に於いては古来の習慣もあることなれば、風俗上より之を攻撃し、之を論難し、之を說破し、之を放逐せざる可からざるを。況や彼の裸体画なるものは所謂豫期意向を以て之を見るにあらざれば、美術上半文の價値も有らざるに於いてをや

論說

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○歌謠論　接前号

佐藤定介

右に述べたる所よりして果して誤謬なからんには、歌謠の効は頗る美術上の妙想を涵養するものにして、實業教育の羽翼を爲すものなれば、寸時も欠くべからざるものなり。然り而して歌謠の効は尚之に止らず、一國獨立の大計より見るも、亦其の必要を感ずること極めて切なるを覺ゆ。試に世人に問はん一國獨立の要素は果して何物なるか。陸に數万の兵を備へ、海に數千の艨艟を浮べ、以て四境を護らば獨立の計果して長久なる可きか。曰く不幸にして至強の海寇を受け、和破れ戰闘く時は、爆烈の一彈は以て數艦の舩を覆すべく、水雷の小艇も亦以て巨艦を溺らすに足れり、假令數万の貔貅、數千の海艦ありとも、豈能く國家獨立の資質を備へたりと謂ふべけんや。盛に貨殖の道を講じ、太に生産の業を興し、交易を廣くして商買を通じ、製造を勵まして物産を増し、以て其の四民を富ます、之を國家獨立の資質とすべけんか。曰く是れ猶未し。國の教化を勵まし全國の學政を振飾して、以て民智を開發せば、國家獨立の計果して長久なるべきか。曰く是れ猶未だし、人民智に長じて、日に奇巧を出だし、以て産業の道を講ぜば、國民の富を増さんこと必せり、然れども智の在る所は爭の存する所にして、財を爭ひ名を爭ひ、事を爭ひ、理を爭ひ、術を爭ふ、皆是れ智の在所に多くして、智なき所に少きは、東

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

西古今の歷史に照らして明なり。國人智に長じて日に相爭ふに當り、一旦敵國の患あれば、民心內に和せずして、人々私利を營み、殆國家を忘るゝに至らん、是れ亦深く恃むに足らざるなり。さらば一國獨立の要素は果して何物なるか。曰く以上陳べたる所の陸海軍なり、殖產なり、教育なり、皆是れ一國獨立の要素にあらざるはなし、若し一を欠けば則ち一國樹立をべからず。然れども此の諸要素と綜核しく、依ツて以て其の効を顯はさしむべき至極の要素あり、苟くも此の要素にして完固ならずんば、他の諸要素は決して其の効を爲すこと能はず。何ぞや。人々其の國を愛する心是れなり、其の國の歷史を愛するの心是れなり、其の國の風俗習慣を愛する心是れなり、今假りに之を稱して一國の心と云ふ。苟くも此の心完固ならざれば、凡百防衛の具は皆其の用を爲さず、譬へば猶四肢諸骸に分布せる諸神經の、腦に於けるが如し、腦既に健康ならざれば、延髓脊髓及び之より分布せる神經は、如何に健全なるも之を用ふる所なきなり。

さて一國の心を養ふは如何なる方法によるべきか。曰く其の事固より一ならずと雖も歌謠を以て之を養ふは亦決して欠くべからざる所なり。何となれば此の心は元來智識上より來れる者にあらずして、感情の上より來れる者なればなり。間々智識上より來りて、愛國心の必要を覺れるものなきにあらずと雖も、此の如きは其の入ること淺くし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、渙散すること速なるが故に、深く貴ぶに足らず、必ずや感情上より来り、其の然るを期せずして然るものあらざる可からず。而して深く此の如き高尚の情を涵養せんことは、一二口舌のよくすべきことにあらず、或は歴史に據りて其の國の来歴を知らしめ、或は其の風俗、習慣の美なる所を講じて、之を保守すべき念を發せしめんが如きは、最も必要の事なり。然れども歌謠の助を假りて、深く優美の情を養ひ、古来國人の作りたる歌謠によりて、國人の真情を詠出だせるものを歌謠せしめ、己の情をして國人の情と混同融化せしめんが如きは、更に切要なる所なり。況や我が國のごとき、古来文藝の林其の人に乏しからず、或は風土の美を詠じ、或は國體の傑出せるを讃し、或は明君賢相の治績を詠じたる歌什秀逸の作多きをや、豈教育の資料に供すべきものなからんや。歌謠の間接に資益を與ふるものなること既に此の如し。然れどもこの歌謠にして若し容易に人心に浸染すること能はざるものあらんには、或は吾人のいふ所は可言不可行の謗を免かれざるべしと雖も、前段既に論じたるが如く、歌謠は實に人類自然の性情に出づるものなれば、之を今日に行はしめんとするも、亦決して破天荒の事にあらざるべし。近く之を實事に照らして考ふるも、兒童生れて三四歳に至れば、常に他人の歌謠を聞きて之に摸倣せんことを務め、朝より夕に至るまで、反覆之を謠ひて倦むことを知ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず、所謂童謠といふもの是れなり。是の時に當りては輿人馬丁の放歌せる鄙俚の俗謠より、優倡歌妓の謠ふ所の猥褻なる歌曲に及ぶまで、苟くも其の耳に入るものは忽ち之を摸しく放歌し、永く記誦して忘れざるものは、吾人の平生に目撃する所なり。斯く兒童が歌謠を好むこと甚しきは、其の自然の性に出づと、其の活動の勢力に富めるが故に之を聲音に發して積集せる勢力を漏らすとに因るものなり。されば此の時に當つて心を教育に潜むるものは深く、注意して鄙猥厭ふべき歌謠を斥け、早く雅正の歌謠を教へ、以て邪曲の侵入を防がざる可からず。而して鄙猥の歌謠を斥けんとするは容易の事にあらざれども、雅正の歌謠にして吾人が稱道する如く人心に浸染し易く、遠大の勢力あるものとせば、鄙猥の歌謠亦反對の結果あるべきは毫も疑を容れざるなり。されば如何に難事なりとも、之を不問に附すべきにあらず、有志者は飽くまで熱心して之を擯けざる可からず。徒に俚巷の歌謠を擯けんと欲するは、甚難事なれども、之に代ふるに雅正のものを以てせば、さほど難事にもあらざるべし。雅正の歌とは譬へば兒童が小學校にて唱歌するにも、或は賢君名相の治蹟を詠じ、或は風俗習慣の美を讃せるものを授くて、知らず識らず兒童を美育に教化せしむべきなり。其の歌の如きは、畏くも皇后宮の金剛石の御製と始め、福羽美靜氏の撰に係るいろは歌、又女子手毬歌のごとき、其の他

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

近来教育者は頻りに唱歌を詠ずるものあり。是れ等の粹を抜き美を撰び、以て教育の料に供すべきは云ふまでも無く、今様軍歌と稱しく目今學者社會に行はるゝもの、如きも亦甚よし。苟くも是れ等のものを拾收せむ、教育の料に供すべきもの豈尠しとせんや。假りに之をなしとするも、教育家たるもの奮進其の責に當るべきなり。

果して右の手段を以て美育を施さば、兒童をして知らず識らず美育の中に教化せしめ、一は以て國家獨立の資となるべく、一は以て美術を益せんこと望外なるべし。然るに世人は優美の情に乏しきが故に、歌を詠ずるものを見れば之と名けてほの〴〵黨と嘲り、甚しきに至りては之をも高天原に追ひ退けんとするもの、如し。何ぞ夫思はざるの甚しきや。然れども一方より之を見れば、詠歌者流の擯斥を受くる所以、亦偶然にあらざるものあり。看よ、歌の目的は優美の情に富み、以て性情を調和し、暗に人心風俗に關するもあるに、是れ等の點に至りては敢て顧みず、明治の今日に至りて尚古体を擬するに過ぎず、所謂ほの〴〵と明石の浦にさまよひ、鳧鴨の群に游かまく、駢五麗七のものにあらざれば歌と稱せず、其の詠ずる所は僅に花鳥風月を弄するに過ぎざるのみ。夫此の如く其の語廣からず、其の題また極めて狹し、以て支那西洋の詩と並び立たんと欲するは、泰山を挾みて北海を踰ゆる類とや謂はん。故に今の世にありては初めは題

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

詠より入りて三十一文字の擬古体を學ぶべしと雖も、粗其の意を得るに至りては、舊窠を脱して現に耳目に觸る、ことをも詠出すべく、其の詞も強に古言に拘泥せざるも可なり、以て子弟教育の料に供すべきをも作り出で、以て俚巷に流行すべき童謡をも詠み出で、直接に間接に、雅正優美の情を喚起せんことを務むべし。若し歌を詠ずるものにして志を此の點に注がず、徒に歌を弄び世人をして却て歌は無用のものなりとの感を起さしめたらんには、歌に冤を負はしむるものは詠歌者流なり、詠歌者流は即ち歌の罪人なり、豈鑑みざるべけんや。嗚呼歌よ、汝は明石の浦に沈淪し、空しく雪月をのみ好伴侶とすべきものにあらず、必らず奮ツて其の勢力を逞くし、天下有爲の士と相提携し、妙想を分與して、以て人心を高尚にし、感情を喚起しつ、以て一國の心を鞏固にせよ。嗚呼世人よ、詠歌者流の固陋を嘲ると共に、歌をも社會外に擯斥せんとする殺風景なる思想を去り、更に其の徳を稱揚することを務めよ。吾人は啻に我が國在来の文學歌謡をば永く之を保存せんことを欲するのみならず、爾来益々西洋諸國の文學等をも導き入れて、之を我が國の文學と混融し、更に其の粹を採り、以て我が國の文學を進歩せしめ、之をして社會の和平を助け、人の性情と冲融して、彼の理科の智識と相左右提携して、人世の幸福を進めんことを冀ふものなり。我が邦人が古来多少の肺腑を勞して、今日までに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

進歩せしめたる文學をも、之を掃蕩せんとするが如きは、豈よく懐に忍ぶべきことならんや。況や偉大の裨益あるに於いてをや。

之を要するに、吾人が論ぜるところは詠歌は思想を及ぶしく之を美術上に利用し、又兒童をして古来の歌謡を諷誦せしめ、感情上より愛國心を喚起せしめんとし、其の之を一般に流行せしめんとするには、區々たる詠歌者流にのみ其責を任ぜずして、苟くも志あるものは鋭意して之が計画をなすべきことを稱道せるにあり。夫西洋支那共に詩あり、巧妙の意匠を吐露し、其の思想また美術上の妙想を喚起する資とならざれはなし。然れども其の一國の心を鞏固にせんと欲せるに至りては、固より國体風俗を異にせるが故に、圓枘相容れざるものなしとせず、且つ文字言語とも異にせるを以て、俄に兒童に諷誦感染せしむること能はず。是れ吾人が特に國風の歌謡を以て、之を涵養せんと欲するのみ。若し夫一科専門を以て、その妙想を涵養せんと欲せば西洋の詩にもあれ、支那の詩にもあれ、吾人も亦洋の東西を問ふものにあらざるなり。

（完）

前號に載せたる在米國S.K.君の寄稿にかゝる「日本の貞婦烈女」といへる論文は、都合に依り其後を掲げざる様同君より申来りたれば、一言爰に斷り置く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝

WHY DO I LOVE HER?

1.

Not for her fortune, her fortune, her fortune,
Not for the lustre that rests on her name:
Were her lot lowly,
Still should I wholly
Worship her, worship my darling the same!

Why do I love her? How can it be?
Because she's herself, just her sweet self to me.

11.

Not only her beauty, her beauty, her beauty,
Not only the sunshine that lives in her face;
Something far nearer,
Sweeter and dearer,
Binds her to me with its infinite grace.

Why do I love her? How can it be?
Because she's herself, just her sweet self to me.

"By Solent and Danube." W. WILSEY MARTIN.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○日光に物する道にて

佐々木信綱

花見しハ、花のふともふに、あをかやま、
　せみのこゑこそ、さかりなりけれ。

夕日さを、かゝしの笠を、ふくかぜに、
　みの毛みだして、さぎの立ちゆく。

吹かぜハ、きのふのなつに、かはらねど、
　つゆこそあきを、ほのめかしけれ。

しのすゝき、穂にハ出でねど、みちのへに、
　なびくを見れば、秋めきにけり。

風わたる、かたそひみちの、かやむしろ、
　たゝまくをしく、すゞしかりけり。

舟まつと、荒川のへに、よれをれば、
　身にしむばかり、さ夜かぜぞ吹く。

月かげの、やどるかえでの、みづのうへに、
　いつしかうかぶ、あきのいろかな。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○花野見に行きて

竹屋雅子

秋もや、涼しくよき折になりぬれば、千種の花見んとて、有明の月まだそのかげ残るほどより立ちいで、行くに、道の程いとつゆ多く、鳴くもよそならぬ蟲の聲々とり〴〵にあはれなり。やう〳〵野へちかくなりぬれば、朝ぎりのま垣のひまより、朝兒乃むかなげにてまどりたる、ことさらに目とまるこゝちするに、尾花の手をさし出して招くは誰ならんと折からとうしう、きちかうの色むづましげなるに、女郎花のなまめき立てる、など口なしもとひとりでたきぬ。藤ばかまのしどけなくひもときそめさる匂ひ、いとなつかしくなんとなくえんなれば、猶つゆにそぼちつゝ、分け入れば、萩のにしきいとうるはしく、枝毎に白露をぬきとめたるは、秋をつくしたるこゝちする、

いつれにか、こえてあはれは、ゐ多て見ん、色香れとらぬ、八千草のつゆ。

猶そこはかとなくあくがれありく道のほとりに、くづのはのうらみがほも、風にそよぎてはなの咲きたるもいとさかしうして、

くさばなの、おのがさま〴〵、さき出るを、など葛花の、うらみがほなる。

など口すさぶほどに。野寺の鐘のひゞきければ。

二十一峯外史

○四海太平記大納言局の事

四海太平記、其の作者を詳にせず。其の文章の聲貌固より孱弱輕浮、竟に渾厚雅健の氣象に乏しく、之を源平盛衰記、平家物語等に比すれば、實に數歩を讓らざるを得ずと雖、また時として氣魄光燄大文章たるの器度ある處有り、未一概に等閑視すべからざるなり。本篇の如き行文平坦他の奇なきもの、如し、而して仔細を看來れば渾て是れ精勁穩當、一字一句も易ふ可からず、蓋し敍事文の摸範となすに餘あり。

さても今度新將軍薨去まし〳〵たるにつきて様々の事ども多き中に、取別あはれを催し奉りしは義澄公の御妾大納言ノ局の御身の上にぞありたる。この御方と申すは中山納言藤原宣親卿の御息女にて、二八の春の比よりも典侍に召されて常に君王の傍に侍り、羅綺にだにも堪へざる貌は春の風一片の花をふき殘すかと疑はれ、紅粉を事とせる顏は秋の雲半江の月をはき出だすに似たり。しかれど君の御覺へ他に異に、三千の寵愛定に一身の上にありしかば、六宮の粉黛はさながら顏色なきがごとし。これに依ツて女御更衣のかずにも列らせらるべし、とかねて叡慮にかけさせたまひける處に、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

永正四年の春の比禁裏に於いて御歌の會ありしとき、藻鹽の煙といへる兼題にて各々秀歌どもを詠ぜられたるに、將軍義澄公もその御會にまゐりたまひしが、即ち御歌を奉らる。君是れを叡覽ましまし〱けるに、　浦に住む、思ひやなぞと、蘆の屋の、絶えぬ煙を、とふ人ぞなき。　歌の樣言の中にふかく思ひ入りたることとありて、君の叡智を仰ぎ奉るの情を底にふくめる歌なり、と思召されければ、義澄已に武門の棟梁となり、官位ともに列祖母おとらず、今なんの希望することどありてか此の情を述べけるぞ、と忝くも叡慮をくだかせたまひける。　折しも去りぬる冬の比宮殿を洒掃せし掃司なりける人の拾ひ集めたる反古どもの中に、あはれなる戀歌をよみてつゝはしたる文どものありけると、ある夜御なぐさみの爲にとて叡覽にそなへ奉りけるに、　紅葉重のうすやうのいときよらありたるに。　しらせぺや、君がかきなす琴の音に、松風ならで、通ふ心を。　又千東乃文にかこと計のいらへもなく、いとふかく怨みたる歌と見えて、　今はたゞ身をしるまでの、涙ふゝ、人のうさには、ぬれぬ袖かな。　ふたつの文まがうべくもなき義澄の手跡なりける上、其のうらに大納言局の書きすさみたまひし歌どももありければ、やがてかの局を召されてひそゝに勅問ありたるに、隱し奉らべなの〱惡かりなん、とや思はれけん、義澄朝臣去年の春白馬の節會の比よりみそめて、公なく戀ひこたりたまひ

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

し事ども、一々有のまゝに奏聞せられければ、さてこそ思中にあれば色外に現はるゝなれ、とありし歌の心まで思召し知られて、さしも御寵深かりける御局なりしかども、義澄戀慕の情を御憐みまし〳〵けるにや、御遊の次にかの局を義澄朝臣に賜ひにける、叡慮の程こそありがたけれ。將軍限なく忝しと悦び、やがて柳營に迎へ入れたまひてより、鎮常に金谷園の春の花に宴し、驪山宮の秋の月と詠めんことを喜びける處に、永正五年二月大內義興徴に難波の浦に攻上りし時、義澄公取るものもとりあへず江州をさして落行き給ひしが、大納言局も御輿にめされて、將軍とあとさきに今道より江州におもむかれけるに、已に其の日もくれかゝり、夕をつぐる遠寺の鐘あはれを催す折からに、村雨しきりに降り、霧ふさがり雲とぢて、咫尺のあひだも見えざりければ、木蔭に御輿をかきすえて、暫く雨のはれまを待ちける處に、近邊の盜賊ども、落人の通るぞ武具はげ、と呼はゐる聲こゝかしこに聞えて、矢を放つと雨のごとくふりければ、御供のものども大におそれ、輿をすてゝぞ逃行きける。盜人どもやがてはせ集り、局を御輿より引出だし、已に御小袖を剝がんとせしが、比なき艶なる御よそほひを見て、此の人を爰にてはぎとるとも如何ばかりの得分あるべき、急ぎ神崎江口のあたりへつれゆき遊女にうり、あたひを分けん、と云ひければ、數人みな尤と同じ、吾つれゆかんとひしめきて、轡をはめ手足をか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らめで肩に、引きつけ走りゆけば、局はたゞ夢に夢みるごとくにて、更に人心地もなかりけり。

已に其の夜も明方に、洛の西南山崎のふもとに栖荒らしたる賤が屋の二三ありける處をたゝきけるに、内より年の程六十餘なる老夫一人表に出で、誰ぞといふ。かの盜人、都よりよき儲して來りたり、今日は爰に預けれくぞ、暮れなば難波にくだる用意としてたべ、御分にもよき得えさせん、といひすて、何地ともなく歸りぬる。主も心ならず内に入れまゐらせけるが、繩を解き供御をすゝめて、徐々にいたはり奉り、去るにても如何なる御方にてまたらせたまへば、斯く憂目と見たまふらん痛ましきよ、このごろ京都の騷動故、士民百姓等自その業をつとめ得ず、渡世たつきなきものに、翌日とも知らぬ老の身のかやうに淺ましき業と仕り候ふなれ、御姿と見奉るに更に凡人とは見えたまはぞ、何をかさのみつゝませたまふべき、御名をなのらせたまへ、命にかへても助けまへらせん、と老眼に涙を浮べて世に頼もしくかしつきければ、局すこし人心地つかせたまひく、汝若し心あらば自を送りて江州佐々貴が方へ連れゆくべし、吾は當將軍の北の臺大納言の局、とのたまひもあへぬに、おに姫君にて座すゝや、吾はむかし御父宣親卿に仕へ申せし小野平内盛次、君御幼稚の折から御勘氣を蒙り、久しく爰に蟄居せしに、不慮に今

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

巡りあひ奉り、主従の縁いまだ盡きざると、ひとへに佛神の冥慮にかなふ故なり、と嬉しきにも悲しきにも先だつものは涙なり、此の上は片時も早く御供申し、江州におくり奉らん、と頓て旅の用意をなし、近江路にこそ急がれける。春も半の旅の空、霞の中に飛ぶ雁の花を見捨て、いづくにか、雪も深山に解けそめて、芦間をながれ行く水の、波の文ある狐川、きつゝなれにし衣々の、過ぎにし夜半をうたゝねの、夢に伏見の里なれや、むかし僧正遍昭が、こけの袂にいくとせか、送りむかふと住みわびし、花山の雲を分々すぎて、幾重かさなる岩根ふみ越へても末は山料や、四の宮河原これや此の、ありし契りに相坂の、關の清水に影みえて、今ぞ打出の濱の名に、大津の浦にぞつきたまふ。是より船に乗せ申し二月十六日の薄暮に、觀音城に入らせたまへば、將軍屋形もろともに御悦び限りなく、御供申せし翁をも、此の度の忠節抜群なり、とてすなはち將軍の近習になされける。かくてぞ憂が中にもなぐさみて、四年をおくらせたまふ内に、局たゞならぬ身をならせたまひて、永正八年三月五日、御産の紐やすくとけて、しかも若君誕生あり。まことに麟玉光を生じ、將軍も玉燕投懐の夢にかなふの嘉祥、當家無窮の瑞兆なり、と淺からぬ御よろこびと、聞えしにおもはずも義澄公、ことし中秋二七の月、影いまだ満てさせたまはずして、雲かくれまし〳〵ければ、大納言の局は佐夜の中山なか〳〵に、憂をみするは命

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なり、おなじ道芝の露とゝもにきえなん、と臥しまろびなげきたまひしを、屋形やう〳〵に諫め、よきに痛はりたまひければ、捨てられぬ身をかこつが中にも、若君生長の行末をたのんで、年月をおくりむかへさせたまひしに、過去の宿善にやよりけん、恙なく生長まし〳〵て、足利第十二代の將軍源の義晴公と申せしは此の若君の御事なり。

本篇倶に三節、第一節は大納言の局の將軍義澄の妾となるの由來を叙し、第二節は其の流離の悲境を叙し、第三節は其の舊臣に邂逅して義澄の在る所に往くを得るを叙し、兼ねて其の終を說く。而して其の筆初節に在りては絢爛纎郁の致を盡し、次節に在りては悽愴傷心の妙を極め、末節則ち或は細緻の筆を用ひ、或は粗大の句をなし、或は波瀾、或は抑揚、一として具へざるものなし、而して徐々として能く前節を湊合して了す、文極めて法度あり、秩序あり、所謂井然として一絲亂れざるもの非耶。

竹取翁物語講義　第八

琴條女史

くらもちのみこは、心たばかりある人にて、おほやけには、つくしの國にゆあみにまから

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ん、とていとまうして、かぐやひめの家には、玉の枝とりになんまかる、といはせて、くだりたまふに、つかうまつるべき人々、みな難波までみおくりしける、

心たばかりある　思慮あるなり　○おほやけ　公なり朝廷をいふ　○ゆあみ　湯浴なり　○いとまうして　暇を乞ふなり　○まかるといはせて　人していはせてなり　○くだりたまふ　都より筑紫をさして下りたまふなり　○みおくりしける　みおくりしけりとあるべきなり

大意、　藏持の皇子ハ思慮アル人ナレバ、工夫ヲメグラシテ、朝廷ヘハ筑紫ノ國ヘ湯治ニ參リマス、トイツテ暇乞ヒヲ申シテ、又輝夜姫ノ家ヘハ、玉ノ枝ヲ取リニ行ク、ト言ハセテ、都ヨリ下リナサレタガ、皇子ニ御仕ヘ申ス人々ガ、皆難波マデ御送リヲシタ。

御子いとしのびて、とのたまはせて、人もあまたゐておはしまさず、近うつかふまつるかぎりして出でたまひ、みおくりの人々見たてまつりおくり歸りぬ、おはしましぬ、と人には見えたまひて、三日ばかりありて、こぎかへり玉ひぬ、

いとしのびて　はしのびて行くといふを省きていへるなり　○のたまはせて　のたまひてといふを敬語にしたるなり　○ゐて　引き連れてなり　○見たてまつり送りて　見送り奉りての意なるべし　○おはしましぬと　筑紫の方へ玉の枝取りにおはしぬとなり　○人には見えたまひて　見えは見られなり人には然見らるゝ様にしたまひたるなり　○こぎかへりぬ　また難波へこぎかへりたるなり

大意、　ソコデ皇子ガ此ノ度ハ極忍ビテ行クノダ、ト仰セラレテ、人ヲモ澤山ハ召連レテお出デナサレズ、極親シクお仕ヘ申ス近習ノ者ダケデお出デナサレ、御送リノ人々ハ御見送リ申シテ歸ツテシマツタ、皇子ハ玉ノ枝ヲ取リニお出デナサツ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

夕様十風二人ニ見セカケナサレテ、三日バカリタツテ、從難波ヘ漕ギカヘリナサレタ

かねて事みなおほせたりければ、其の時一のたくみなりける、うちたくみ六人をめし取りて、たはやすく人よりくまじき家をつくりて、かまへを三へにしこめて、たくみらを入れたまひつゝ、御子も同所にこもりゐまひて、しらせたまへたる限り、十六そをかみにくどをあけて、玉の枝をつくりたまふ、

かねて事みなおほせたりければ　前々より玉の枝を作る下心なればあらまし其の用意ありて種々の事を仰せ置かれたるなり　〇其の時一のたくみなりけるうちたくみ云々　一のたくみは諸本多くひとつのたからとあり、解し難し。當時第一の匠といふ意なるべく思はるれど今斯くたゞしつ　うちたくみは抄本に一本かちたくみの誤か鍛冶工なりと注せり又うちたくみとあるは鍛冶か金鐵をうつとはいへりなど注したれど彼の文を思合するに内匠にて内裏につかうまつる大工なるべく覺ゆ解には一のたくみゆまろと校正してゆまろは匠の名なりといへれど如何。今諸本を考へ合せてかくはものしつ　〇たやすく　容易くなり　〇よりくまじき　寄來まじきなり　〇かまへを三へにしこめて　かまへ諸本はかまど、あれども解しがたし今解によりて正しつ。人の來らざる爲に三重に構へをしたるなり　〇しらせたまひたる限り　知行所のすべてをいふなるべし　〇十六そをかみにくどをあけて　十六そは抄に十六所なるにやとあり。解には十六莊ならんといへりかみは解に頭ならんかといへりくどは抄に和名抄を引きて竈と注したり前にかまとを云々とある故斯くは考へたるべけれど是にては解きがたし。今案ふにくどは供度にて十六莊より奉る貢物ならんかあけては擧の字にて御子の知行所十六莊の貢物を擧げて玉の枝をつくる料に用うる意なるべく思はるれど此の一節いたく誤字脱字などあるべく覺ゆ尚考ふべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大意、 皇子ハ實際湯治ニ行クデモナク、又玉ノ枝ヲ取リニ行クノデモナク、忍ンデ居テ玉ノ枝ノ細工ヲスル心デ、兼子テヨリ色々ノ支度ヲ仰セ付ケラレテ置イタカラ、其ノ時第一等ノ大工デアツタ内藏ノ大工六人ヲ召ビ寄セナサレテ、容易ニハ人ノ寄リ來ラレナイ所ヘ家ヲ作ツテ、構ヘヲ三重ニ仕込メテ、其ノ中ヘ大工等ヲ入レテ置イテ、御自分モ同ジ所ヘ籠ツテお出デナサレテ、御知行所十六莊ノ頭ニ仰セテ、其ノ貢物ヲ取立テヽ、用度トシテ、玉ノ枝ヲお作リナサレテ居タ。

かくやひめのたまふ樣に、たがはず、つくりいでつ、いとかしこくたばかりて、なにはにみそかにもて出でぬ、舟にのりて歸りきにけり、と殿につげやりて、いといたくくるしげなるさまして居たまへり、

のたまふ樣に 前にしろがねをねとしこがねをくきとし云々とある如くなり ○かしこく の解前に出づたゝにては巧にといふ意をふくめり ○たばかりて 前にもいへる如く思慮ることにて人をたばかる（謠詐）といふは從に轉じたるなり ○みそかに ひそかにの意なり ○殿につげやりて 我が家へ告げやりたまひたるなり ○くるしげなるさまして 諸本くるしかりたる樣してとあれど解によりて改めつ。舟にのりて歸り來にけりと告げやりたるもくるしげなる樣して居たまへるも皆かくや姫を欺かん爲の方便なり

大意、 トウ〳〵かくやひめノイハレタニ寸分違ハズ作リ出シタ。シテ大層巧ニ工夫ヲシテ、海路ヲ歸ツテ來タ樣ナ風ニ見セカケテ、其ノ玉ノ枝ヲソツト人知レヌ樣、難波ヘ持ツテ出タ。サテ舟ニ乘ツテ歸ツテ來タ、ト我ガ家ヘ告ゲテヤツテ、大層ニヒドク苦シイ樣ナ風ヲシテお出デナサツタ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

○でも淑女（中）

鐵筆將軍

「山川さんお早うございます。」
「オヤ松本孃ですゥ。大層お早うございましたね。妾は今、朝飯をしまツた處ですよ。」
「いつもお早いのヿねヱ。ン、解りました、夕の筋ですね。アハヽヽヽ。」
「夕の筋とは何でを。」
「昨夕の筋でれ解りヿならないから、昨夕のれ…つ…かき…筋。アハヽヽヽ。」
「アラ松本孃は真成にいやですよ、なんですねヱ。頃日はそんな事ばかりおツしやる樣ヿおかんなすツたが如何なすツたのでせう。」
「鳥渡まア、うんなむづかしい事をれツしやらずに、れ聞なさいよウ、お聞わなさいツていへばさ、今僕もね——ン、僕といふと又叱られる——今妾はね、此家へ来る途中でね、大層ゐ……ものを見ましたの。」
「何です。」
「何ですツて野暮——オヤ失敬——不粹でゐらツしやることね。美少年！」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「何かと思ツたら、またそんなお話してをる。解りましたよ、モー解り済しさよ。そんなことは聞きたくはございません、そんなことは聞く耳は持ちません。」

「マアお聞なさいよ、お聞きなさいツてツたらさア。妾が此家へあがります途中、さうでもねエ丁度半分道などまゐりますと、遙に見ゆる二人の少年。段々近づいて見ると、一人は非常な醜男、年齒二十三四、身の丈四尺二三寸、低き鼻、丸き目、しだらなき口、亂杭の齒、それにかて、加へて紺屋の明後日ほども延びし髪の毛——オヤ働詞のない文句、紅葉山人の文章が出來た、アハヽヽヽ——それからモ一人は………」

「イヽエお止しなさいまし、真成に聞きませんよ。」

「マア宜しうございますさア。それからモ一人はね、色白く鼻筋通り、眼はパツチリとして脣紅なり、唐様にいへば風流瀟洒、彌子瑕の幼兒へ、董賢を細末にして加へたといふ容色——それからなんだツけな、さう〳〵——ズツトやはらかに之をいへば、秋の夜長に梅若丸、または業平のあらは姿、尚一つ景物になめていへば、バツキンハムの侯となりたる英のジヨウジ、ウビリアス的ボーイ、ウフド——アーされながらエライ、春の舎さんを丸吞なした——まアざツとそんな美少年でしたよ……宜いぢやございませんか、お聞きなさいよ、これからそんなら小說口調で言ひませんからお聞きなさいよ。それからね、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

誠に其の通の美少年でしたから、流石の僕……じやアなかツた……妾も、思はず見とれて、道の真中へ立ツてしまいましたが、落花情あらば流水豈意なからんや、向ふでも――其の美少年も、妾の方を見て莞爾笑ツて、矢張立ツて仕舞ひましたの。瞬間――實に瞬間――妾が其の時の瞬間の心持は、まことに何ともかともいはれませんでした。其の時憎らしいじやありませんか、真成に今考へて見ても憎らしいや、西の方から一人の車夫めが、ガラ／＼と車を走らして来て、僕につきあたりさうにして『あぶねヱ、此の畜生め』。僕……じやアないツさ……妾も驚いて飛び退きましたさ。彼此する中に、其の少年は朋友にひツぱられて見えなくなツて……………アラ山川さんは他の話を聞いてる体をして本を讀んでゐらツしやるね、人にさんざん骨を折らして置いて。」

「ハイ本を讀んでゐますよ。いくらお止しなさい、そんなお話はお止めなさいツて申上げても、益々お話しなさるから、妾は本を讀みはじめましたのですよ……漸く湯が煮え立ツて来ました、まアお茶を一杯召しあがれ、今入れますよ……。」

「頂きますともね、請願うまく入れて頂載…… ヘイ有難うございます、大層よく出ましたことね。」

「真成に松本さんよ、妾は決して悪いことは申しません。少し差出がましい申分か知

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りませんが、そんな話は決して他の前でおはなしなさるなよ。どうも貴孃は近頃妙なことばツかりおツしやる樣になツて、御勉強の方が少しそツち退けになツた樣ですよ。近頃のまア新聞雜誌を御覽なさい、大抵女學校の生徒の不品行を書かないのはございますまい。貴孃も苟くも女學生の一人ですから、彼樣ことの書いてあるのを見ゝ、お心持の宜いことはございますまい。さうでせう……お心持が惡いでせう。然れどもいくらあんな事を書かれるのが厭でも、御自分が先ず亂暴な所作をしたり、猥褻な話說などをした日には、仕方がないぢやア御座いませんか、何如なことをいはれ、何如な事をか、れたとて、仕方がないぢや御座いませんか。妾の前へおいでゝさへ彼の通りのお話しなさるのだから、他のお友達の中では如何樣なはなしをしておいでなさるか、誠にわかりません、嘸まアと思はれますよ。」

「なんですツて貴孃、妾は誰の前でも同じですわ。けれども妾は此樣なガラ〳〵した性分ですから、兎角ガラ〳〵した事を爲たり言ツたりしますけれども、ソラ彼れ瓢箪といふものと同樣、中心はしめくゝりがありますよ。そこへ往ツたら貴孃なんぞは却て……かも知れません、アハヽヽヽ。」

「其樣にお茶にしてしまツてはいけません。何にしろ貴孃の學校では、未試驗が濟ま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ないそうですが、何れ近いうちでせう、其の準備などはおてでございますか。」

「さうです、試験は最う直ぐ始まります。然れども妾は御存じの通りの勉強家ですから試験前だつてなッて齷齪はしません……ン、串戯は止めまして、實際試験の準備のおてないに困りますの、如何したら宜いでせうねエ。」

「それ御覧なさいまし。今更如何したら宜からうッて、御相談なすッたッて仕方がないぢや御座んせんか。常にや御勉強といふものは少もなさらないで、たまさか机に對ッてお居なさるかと思へば、小説をお作なさるとか……それは御熱心。もウ〳〵小説を作るのなんのといふ妄想は取退けてお仕舞ひなさい、實に彼樣な事は爲に惡う御座います。さう申しては失禮ですが、今貴孃や妾などの處は、折角收穫の時で、未種を蒔く時では御座いません。好し蒔いたにしても未熟の種ですから、如何して立派に生えませう。それよりは貴孃、ネエ松本さん、お心を遠く大きくお持ちなすツてね、充分に熟した種を、充分に收穫ましてねエ、それから蒔くなら蒔いて御覧なさい、如何にも立派に生えますわ……………。」

「然れども山川さん、妾はパー子ー孃のエベリナ名が氣になッてならないのですよ。」

パーネーが何程の才女だッたか知りませんが、十七歳の時に彼れほどのものを著いて、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼れ程の評判を得たと思ふと…… ……。」

「そらそれが妄想ですわ、一方ばかり見て又一方を見ないと其様なお考も起りませうが、それではいけません。遠く西洋に例を引かないでも、目前の手本が澤山ありますよ。花月女史とかゝ小說文庫へ書いた痴蝶之刃、妾は讀んでは見ませんが諸新聞雜誌では彼の批評……。其の他前には少しは喝采を博した婦人もありましたが、其の喝采もよく聞いて見れば女性へ對するお世辭の喝采ですと。お世辭の評判喝采を得て何程心持の宜いことがありませう。」

「さうです、真成にさうでも、小說は是れから止めませう。小說は止めにしても宜いですが試驗には困りましたよ。妾が危險なのは會話と算術ですが、コンバーセーションの方はまア心配はなからうと思ひますもの。英語の先生は餘程妙ですからね、妾が是から毎日お化粧をよくして、意あり氣にホヽと笑ツて、御機嫌をとれば、何如に不出來でも七十點ぐらゐは此度呉れませうよ。」

「あら貴孃はそんなことを考へておいでなさるの、真成にこまりものですねエ、申上げたくはございませんが、其様こまではあるまいが。少しはお國のお母さんやお父さんの、貴孃を此地へよこしてお置きなさるお心地もお考ひなさいな。あなたどまア

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此地へよこしてお置きなすツて、常々何程の御心配をしてお座なさるでせう。貴孃を此地へ大金をかけてよこしてお置きなさるのは、如何いふ御目的なのでせう。妾の親なども私の處へ手紙を送しますときは何時でも、時候が惡いが身体は惡くはないか、身体をいとツて勉強をして、而して早く立派に卒業をして呉れろツてかいてあります。貴孃の親御様も此度さうでせう、試驗がむづかしいが、教師に心ありげに見せかけて點と取るなど、いふことをお聞きになツたら、如何でせう。ねエ貴孃、こんどは最う如何も仕方がございませんが、是からまア請願お心を改めてねエ。

「ハイさうですよ、妾の親だツて、そりやア妾の此頃の様子を見ましたら……嗚呼これから勉強をしませうよ。然れども貴孃はまア如何したんでせうねエ、真成にお靜かで、御勉強で、此の間の卒業試驗は皆百點をお取なすツたあとなどは、妾の學校で誰も知らないものは有りませんよ。それでまア立派に卒業してお仕舞ひなすツて、實にお羨ましうございます。御國のお母様がお迎においでなさるツてお話でしたが、最う直にお出でになりますか。」

「さうです、未二三日間がありませう。然れどもえ松本さん、妾は家へ歸るのは真にいやですわ。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「然れども立派な卒業をなさツて、お歸りなさるのですから——錦を着てお歸りなさるのですから、宜しうございますわね…………話は別ですが、山川さん、眞はこんどの試驗のアリスメチックには困りましたから、誠に恐れ入りますが、今晩少し調べて戴く譯に參りませんでせうか。」

「さうですねエ……さうですねエ……今晩は少し……さうですねエ……今晩は少し差閊がございまして……………………。」

でも淑女（下）

「アー宜い月、どうも宜い月、實に何とも形容は出來ない。庭の竹の戰いでるのも、何が月に見とれて戰いでる樣だ。石燈籠の下で蟋蟀の鳴いてるのも、何だか月に浮かれて鳴いてる樣だ。それに彼の萩の露——萩の露の月の光に映ツてチラ〳〵して居る樣、まるで氷にちがひない。雅頼朝臣の歌に、

くまもなき、唯空に秋の、月すめば、庭には冬の、氷をぞしく。

とあるが、成程違ひない。此の景色を觀てます〳〵其の妙が知れて來た。　アーどうも宜い月、此の月をみて何だか心も幾分か晴れ〴〵して來た。月といへば思ひ出す、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ロングフェルローの Bridge.の詩

I stood on the bridge at midnight,
  As the clocks ware striking the hour
And the moon rose o'er the city,
  Behind the dork church-tower.
I saw her bright reflection
  In the waters under me,
Like a golden goblet falling
  And sinking into the sea..........

實に面白い詩だ、實景から說き起して、末段に數多の感慨を寓せた處、絕妙といふより外別に何ともいひ樣はない。實に面白い詩ぞ。　オヤ彼處の屋根の上に立てるものは何だらう。成程ちがひない、今夜は七夕だ。

白紵新裁諸女兒、　玉腕纏紹五色絲、　含レ嬌爭上乞巧樓、
樓上高褰翡翠帷、　絳河一帶月欲レ流、　烏鵲雙飛玉露秋、
誰道牛女津梁阻、　一年相思一夕休、　君不レ見人間咫尺行路難、

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

禍福相尋指一彈、　薄命紅顔難自持、　誰得年年永相歡。此の七夕の詩も面白い。妾の心を能く穿ツて居る。アーアー人間咫尺行路難、禍福相尋指一彈、薄命紅顔難自持、誰得年年永相歡、真成に此の道りざ。悲しいものだ、くやしいものだ。　然れども最うおいでなさりさうなものだが、大層遲いことよ、牽牛織女は鵲の橋を渡ツたらうに…………。　オヤ彼處に立ツて居るのね……ナンダ石燈籠の影か。アー待遠しい、待ち遠しい………ア、彼の小い聲で呼んで居るのね……。」

「山川さん、山川さん、宜いかい、真成に宜いかい。」

「漸くまア来た……宜いよ、お入よ、早くお入りよ………真成に待たせたねエ。」

「ナニ早く来やうと思ツたんだが、ツイ用があツて…………。」

「アラ又そんなことを。Pretext は聞きたくはありませんよ。何處の宜い處をよツて来さ、と有体におツしやい。」

「宜い處ツて此處より僕に宜い所があるかエ。アハヽヽヽ。」

「又茶らしてしめた、いやでをよ、いつでも〳〵人にばかり待たせて…………それに今夜はね、矢張妾の卿のもので、此地の女學校へ入ツて居る松本といふ孃が、是非 Arithmetic を少し調べて貰ひたいといふて来たのさ。其の前にさん〴〵勉強せにやアいゝない、

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

此の頃は不勉強の樣だが、そんなことぢやアいけないなど—、澤山異見をして置いて、而して調べて呉れといいそれたのだから、誠に斷りにくツてさ。然れども其樣なことまあまツては居られないから、斷然ことはツて仕舞ツた。眞に此も彼も誰のお蔭ですヱ、これさ、これさ、加藤さん、加藤さん、加藤庄三郎さん。」

「アーいたい、いたい、勘辨して頂戴、勘辨して……………。殘酷ですねヱ、貴孃は。」

「殘酷ですよ、然れども妾の殘酷は形而下の殘酷だから宜いけれども、貴君のは形而上の殘酷だから甚いやね。」

「そんなむづかしい話は止めにして、何か甘い話をして頂戴な……　甘いッてへは何か甘い物はないの。」

「有るよ、葡萄酒を取ツて置いたよ……サア一つ召上れ。」

「イヨウ是れは上等、大層色が濃いね。」

「妾の心ですよ。」

「ヘン又洒落る。落洒を聞くより酒を飲むとしやう。サ尚一つ下さいな。」

「妾も洒落をいふより酒を飲まふ。ひとつお酌して頂戴。」

「さう／＼肝腎なことを未わすれて居た。これ山川孃、これ山川孃。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「恐ろしいそんなに改めておツしやるのは………。」
「おゝ外のとでもないが、貴孃がこんど卒業したので、お母さんが迎に來るとさういツたじやないか。もう來るかエ。」
「さ樣、未二三日間があるだらうと思ツてるけれども………。」
「それで、來たらば貴孃は歸るのかエ。」
「どうして歸さるもんか。こんな人が居るんだもの。コレ……コレ……………。」
「いたい…いたいよウ……此度歸らないかい、眞成に此度歸らないかい。」
「どうして歸れますものかよ。」
「其れでも迎に來られたら何て斷ります。」
「斷り方ぐらゐは妾だツて知ツて居ますわね。」
「そりやア知ツて居るだらうけれども……家にはもう立派なハスバンドがあるんじやないか。お母さんがおか〱承知しないだらうが。」
「爲ても爲ないでも、何でも歸らないから宜いよ………　もう妾は大層醉ツてしまツた、さア膝をかして頂戴。」
「最う横にならうといふのであエ、僕も非常に醉ツてしまツた。何か例の美音で一つや

らすかい。『秋の夜はながいものとはまん丸な、月見る人が心かも、ふけてまてども こぬ人の、おとづるものは鐘ばかり、かぞふる指も寢つ起きつ、わしや照らされて居るわいな。』」

「なんだねエ、そりや妾の響の心さし、貴君の來るのを待ツて居た時の心さ。妾も一つやりませうかね、どうも端唄は賤しくツていけないけれども、『むらさきの、むすびめかたき縁のいと、ぜゞぬえ色の深みどり、まつまこぬ夜はふでのさき、すらみかさねし　いのちげも、硯のすみはまるほど、深い淺いは誰とかと誰とか、苦勞をるのも君ゆゑに』……君ゆゑに…… …　上手でせう、オホヽヽヽ。」

「どうもれ上手、實に金玉の音、しかも節に適ひ律に合ふ、此度梁上には鼠がおどツて居るだらう、水中には魚がはねて居るだらう。アハヽヽヽ、アハヽヽヽ。さア今度は何か一處にやりませう。常磐津かね……ン、常磐津は長くツていけない。それでは長唄……これもいけない。それでは矢張端唄が淡泊で宜いや。」

「端唄が淡泊ですと、オホヽヽヽ。まア然れども雜作ないからそれとしませう。端唄の何。」

「さう、何にしやう。」

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

「お互が互いだらう。さア。」

「さア。」

『おたがひは知れぬが花よ、せけんの人に、知れりやたがひの身のつまり……』

「オヤまア、しづかに……誰か来た様だ……これさ静かによ……アラ何とか妾の名を喚しくるやうだ。お母様のやうな声だが……アラお母様だ、まア如何しやう。」

「エッ…………。」

「御免なさい、お花は居たかへ、大層遅くなツたよ、宮脇さんも一処に来たよ。宮脇さん、さア此処へお入ツなさい…………オヤ此の方はどなた…………。」

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

鳥渡松本嬢、今日山川に逢ツたツて真成。」

「逢ツたよ、何でも山川に違ひなかツたよ。」

「如何な様子だツたへ。」

「そりやアもう話にも何にもならないの。彼の加藤がきたない洋服を着て、造髯をつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

々て、さうして麵包を擔いで賣ツて行くのさ。それで山川がまア矢張洋服を着てね、三味線をひきながら、唄をうたツく——何だか猥褻の唱を唱ツてよ………。」

「甚いねエ、如何、如何したんだらう。」

「如何したんだツく、未知らないの、山川はあんなに學問も出来、品行も宜く、真に淑女だと思ツたら——山川彼女自身も淑女を以て自許して居ながら——他に向ツても何時でも異見などを言ひながら、どうして〳〵甚いのさ、疾にLoverなどをこしらへて…………其の加藤といふのがLoverよ。さうしく去年卒業したときに、其の加藤と樂しんで居たのだとさ、其處へ國から母が来たのだとさ。丁度運わるく母が東京へ来て、直に山川の未来夫の宮脇とかいふ人に逢ツて、二人で山川の宿へ訪ねたのだと。さうして山川と加藤とが樂しんでる處へ往ツたんだと。だもんだから、直に惡いことが知れる、其の未来夫とは破談になる………いろ〳〵又もめてね、到頭山川は加藤を逃げて仕舞て、方々、そりやア、うろついて歩行たのだらう、遂に仕方がないから又東京へ来て、彼様な事をして居るんだらう。真成に何てツて言いだらう、妾などは随分異見を聞かせられたで……、さう〳〵去年の今時分ざツた、ヤレ小説は作るな、品行を能くせふやいけない、何だとか漢だとか、大層長い講義をされたぜ。それで御自分の態は彼の通り。」　（めてたし）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鴫立庵主人、坐して鶉の如く平伏低頭、看客ニ御詫申上ル。主人當初夏より止むを得ざる用事出来、主人には不相應なる富山の縣に放逐せられ、今現ニ驅使中にあり。主人が苦役に暇なき、終に今日主人をして諸君に御詫言を申さしむるニ至れり。從前怠慢の罪は後来勤續の功と差引して、今回より再びこぎ出す稻舟の、いな應なしニ吉野川の、よしあしの品評は之れを水ニ流して、唯愛讀の程とのみ希上候。

○吉野川　　鴫立庵主人

第三、寄せかゝる細れ波。

甲「然し君、今の處ではまづ〳〵八分通り目的を達し得たと云はなければなるまい。」

乙「ノウ〳〵、君は周旋の功に誇るつもりで左様いふけれども、未だ彼れの承諾を得たのではなし、且つ初對面……多人數の中で真逆僕の真情を吐露する譯には行かず……云はゞ高嶺にのぼる麓半腹にも達せぬ内に、絶頂の花を折り得たつもりでは恐入るぜ。」

甲「けれどもまア聞たまへ、僕は今日恰も媒妁の地位ニ立つものだらう。だからして兩人の擧動には其れとなく注意をもつて實ニ至れりといふべしさ。誰も居ないか

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

ら云ふけれども、君が彼れに視線を注ぐこと八度で、彼れが之を見て見ぬ振りをなし、其の度ごとに薄紅葉を顔に散らしたのは、暗に黙諾を證明したものではないか。其れに君が作ッた短冊に書いた歌を彼が唱歌に謡ふし、彼れが十三絃を彈じたると丸君が特別に譽める工合なんて、何様しても偶然的じやなからうと思はれる。尤も僕は媒約の功能があッたといふものだらうから、君のことながら誠に喜ばしいわけさ。」

乙「君はどうも事實を……附會するからいかん。けれども、兎に角君の今日の勞は充分謝すから………。」

甲「ハヽヽ、アハヽヽヽヽ、左様でなければならんく。僕にどんな報酬をする積りか。」

乙「そりや若し目的を達することを得たならば何でも君の望む所のものを以てする。」

甲「いやこれはどうも有難い。然し僕は別に君に望む所のものはないが……タツタ……タツタ一つ君に依頼があるて。」

乙「はてな依頼……なんだ依頼………。」

甲「實の處をいへば、君に今日の僕の地位に立ッて貰いたいのさ。」

乙「はゝア判然た、判然た。して見ると今日の會は、強ち僕ばかりの爲では無かッた、道理でおかしいと思ッた。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

折りしも下女聲として、

下女「誠にれまちどうさま……。」

杯盃持ち運ぶ下女の聲に、甲乙兩人の談話は折ちたされて、暫し相對ひざま飲むことに餘念はなかりし。もとこれ兩人の對酌、櫻顔柳腰、婀娜嬌嫋の其の間に周旋をるなければ、飲みては獻し、獻しては飲み、盃行最もしげく、酣醉寸時に来る。

乙「アー醉ッさ、時に君……此れからの手續きを何樣したらよからう。」

甲「此れからの手續きッて……どうも君のお坊様にはこまるねエ。既に交際の端緒が開けたから、あとは只君の方寸にありさ。」

乙「さアーそれに弱ッたのさ。どうした……實にどうも……。」

甲「仕方がない男だなア、よしそんなら僕が最後の一計を授けてやらう。」

うち語らふ兩人の話の始終を考ふるに、前回に於いて通常一般の宴會にあらずといふなる今日の集會——彼の花園の痴蝶が芬香の間に狂飛嵐舞するがごとく、兩々翩々、手携へ足觸る、の間に、意示目通、言はずして情を送り、語らずして意を傳ふる舞踏夜會の類にあらずといふなる、紳士淑女の小會も、其の實一部の者が目的を達せんとする材料となり、媒妁となりて、清會も却て兩人の爲に汚會となり果てなんとす。今や世潮は男

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女の集會を押し寄せ來りて、人々も亦交際の自由を公許せり。是を以て提携公園を散策するも、同乘車上にあるも、人之れをあやしまず、之を咎めず、甚しきは握手接吻、以て人に接するの禮となすに至る。握手接吻、歐米にありては禮たらん、日本にありては猥褻淫行の端を爲す、國異なれば風俗もまた異なり、自然の理法に違ふものは久しからずして亡ぶとぞいふ。七歳にして席を同ふせずとは漢土の敎、今にして之れを實際に行ふべしとは思はれざれども、却て交際の自由を許すの弊害を看破せるものゝごとし。嗚呼これが理非曲直、誰を待ちてか知るべきぞ。兩人が抱ける交際の主義果して何の點にあるべきぞ。

牛込八幡町なる山本靜の門前に、一輛の車を留めて今下りなんとする兩人あり。一人先きに立ちて、後なる一人を誘ひ、門の戸押しやりて内に入れば、内よりは小女出で來りてあわたゞしげに、

小女「オヤ兄さんお歸り。 あら宮島さん入らッしやい。 お母樣宮島さんが入らッしやいましたよ。」

母なる人は靜にいでむかへて、

母「これは〳〵、さアーお上りあそばせ。お由（下女の名）や奥へ燈火をお點け。さア奥へ…。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兩人奥の一間へ通りて打ちくつろぎ、今日の集會につき人々の上を彼是と品評をめり。かゝる處へ小女は火鉢布團など持ち運び、冬ながら春の木の芽をたて來りて兄のそばへおき、直に立ち去らんとすれば、兄は聲あらだて、之れを咎め、

兄「馬鹿な奴じやないか、黙ツて此處へ置いていツてどうする積りだ。何故ついで御客様に差上げないのだ。大馬鹿め。」

妹「只今お茶菓子を持ツてまへらうと思ひまして。」

兄「お菓子を持ツて來るのは極ツて居ます、お茶をさしあげて置いて、それからそれ茶菓子を持ツて來ては惡いのか。分らない娘だなア、大きな形をして、もう幾歳になるんだ。」

女は男に敵せず、況んや妹たるもの、兄に對するに於いてをや。小女は黙然顔うちあからめ、盆ひきよせて茶碗につさんとするを、再び兄は、

兄「ソレ〳〵、溢れるぢやないか不氣容な。」

宮島は堪へずやありけん、この時妹の援兵として横合より兄の方へ向ひて、

宮島「オイ君また、始まツたぜ、何をさうやかましく云ふんだ。こぼれる時は急須が惡いからじやアないか。又君の傍へだまツて置いて行かうとしたのは、君について呉れろといふことだし、何も別段いふことは無いじやアないか。ねーお豐（妹の名）さん。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

妹のお豐はこの宮嶋が詞に助けを得て、其をしほとして立ち去りたり。

兄「女のくせにまごつきふ歩行かないか。」

宮「これ〳〵、何か意志がへしでもする樣に、さうつけ〳〵いはなくも宜いぢやアないか。時に明日君は例の通り宮内省へ出勤して三時か四時には歸るかね。」

問はれて山本靜は、

山「左樣さ、此の頃は少し忙いたれども、四時までには大抵歸るだらう。」

宮「そんなら丁度僕も學校から歸つて居る時分だらう。鳥渡來て呉れたまそんか、彼の最後の一計について色々内談したいから。」

山「實は僕も此樣なつて見ると何だか心が急いて仕樣がない。明日は歸り次第、是非伺ひますから、明案をおんがへて置いて呉れたまへ。然しまア宜いぢやないか、まださう遲くはないし、話したまへな。」

宮「けれどももう歸る。そんなら明日は待つてるぜ。」

山「どうしても歸るか、そんなら失敬するよ。實に今日は御苦勞ざつた。」

靜は玄關までおくり來り、下女も燈火を持ち、母なるひと及小女もおくり來りて、共に禮義を述べ、宮嶋は神田なる吾が家さして歸り去りぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

母は火鉢の傍へさしより、いともやさしき聲音もて靜に向ひ、
母「今日は何かの宴會でもあツたのかへ。宮島さんも何時もよく御氣嫌がよかツたね。」
爵「今日はすこし………歸りに神田の開化で…………。」
といまだ對へも竟へざるに、火鉢の彼方に居眠りせる下女のお由にむかひ、
爵「およし、およし、居眠りばかりして居て……もう與を片付たさか。人が用を云ひつけなければ用はしなくツても宜いものだと思ツてる。」
母「まアさう齒みつく樣にお云ひでないよ。奉公人なぞといふものは、あまり小言をいふと却て………。」
爵「小言を云ふとれ言ひなさるなれども、默ツて居れば何でもうツちやツて置くぢやアありませんの。あなたまでがさういふ御氣ですから、皆んな增長して、お豐までがこの頃は人のいふことを些も聞きやアしません。」

教育小說　劣夫傑女譚
ペスタロチ　原著
山縣悌三郎　重譯

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第六回　悔む詐言に装ほふ偽徳　談る惡事と繕らふ虚飾

村長は家々を廻りけるに、村人の待遇も各様なり。されど孰れの家に到りても、貧民は皆此度の恩命を聞きて始めは疑ひ或は驚き、漸く其身の造化好きを覺ゆれば、喜び感ずること一方ならず、村長にまで厚く謝禮を演ぶるも多かり。斯くて村長フムメルは路を急ぎて行く程に、意はずもハンス、ヴエストに出で遇ひたり。

村長『是はヴェストなるか、曩日貸せし金子の事よもや全く忘れはせまじ。』

ヴェスト『吾れ今日は金を持たず、されど彼の負債の事を憶ひ出す毎に貴き利息になりたりと思はぬ事はなきぞかし。』

村長『ヴェスト足下は何をいふぞ、足下は唯我が幾度か聲高く讀み聞々しと詐ならずと法庭にて證人となりて誓ひしのみ、さるを今彼是と論ふは返濟の日を延べせん爲めか。』

ヴェスト『否な其の推量は違ふたり。若し我れ金を持つならば直に貴殿が足下に擲ち還して再び又貴殿の如き惡人に從ふことは爲すまじきを、吾れ彼の一件を思ひ斷んと思へど、先の領主が當務に爾思ひ取り給はざりしは、今更囘らぬことなりき。』

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

村長『先の領主が如何に聞き取り給ひしとて、足下の與り知ることかは、足下は真實ならぬ事と誓ひつるにはあらざらん。』

ヴュスト『否、那の事は明らけき詐僞なり、憫むべきはルーギーなれ、吾れ何所に往くとても、ルーギーの面容が目前に遺り忘れんとすれど忘られず、吾れ詐僞の言を誓ひて彼が牧場を失はせしより、その時までは健康にて花の様なる兒童等が瘦せ羸へし今の狀態、皆我が爲せし業なりと思へば〲堪へ難し。』

村長『足下は固より彼の牧場をルーギーが物ならずといひしにあらず、又我が物なりといひしにもあらず、牧場が誰の物なりとて足下の關ることならんや。』

ヴュスト『牧場が誰が手に落ちたりとて我には少しも關からねど、我が詐僞を誓ひしは回す〲も悔しけれ。』

村長『足下は敢て詐僞の誓を爲せしと謂ふにはあらず、往つる事と桑々と思ひたりとて益はなし、いざ我が店に來りて一杯傾けぞや、心の鬱も忽ち霽れなん。』

ヴュスト『否、村長今は如何なる物ありとて我が心を慰め得んや。』

村長『愚けき事をいふものかな、足下の書券爰にあり、我れ足下の見る前にて此の書券を扯き裂き棄て、其責任を我が身に負ふべし。』

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ヴュスト『如何なる責任にても貴殿自から負はゞ負へ、明後日は我が日曜日故鮮衣を賣りて貴殿に負債を償てん。』

村長『愚かしきことを言ひ給ひそ、我は今より用事ありいざ是にて罷りなん。』

ヴュスト『とは真に僥倖なり。貴殿と長く語らはゞ我れ發狂はしくなりやせん。』

斯くて兩人は別れたるが、村長は快からぬ思ひつゝフヱリックス、クリーヘルといへるものゝ家に往きける。此人外觀は至て謹厚温和くして人に接するにもおさ〳〵禮儀あり、會堂の參詣を怠ることなく、説教あらば必ず往きて聽かざることもなし。村に住へる眞信派（信教の一派）の人々に好意を得んと務むれど、未だ充分に親しみ得ざるは專ら此派に入るときは他の村人の侶伴より斥けられんことを恐るゝなるべし。されど德を施しを他人を憐むことはなく僅に家族眷養へども即ち妻子を困むる事由となることゝ常多あり極めて貧しき中なれど、三度の食は那何と味善き物を擇り好みて已れ獨り之を食ひ、得ざる時は氣色を傷ね、瑣細の事に托けて怒り罵る言斷えず、別に咎むる事なき時は今年四歳なる小兒が側目して已が面を見たりとて親を敬ふ禮儀を知らぬ、懲してやらんと幼兒が紅葉に等しき小さき手を痛しく撃ちけるに、妻は遽て推し止め、「粗暴なる事做し給ひぞ」と諫むる言を忽地怒り、力に任して蹴着くれば、妻は躓き其場に倒れ頭部

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に二ケ所の重傷を被り、夫は斯くと見るよりも、是は我が名聲を損ねやせんと、打ち敺くこと大方ならず、遽に妻を慰めつ『必ず人に告げ給ひそ』と泣かぬばかりに囑みけるにぞ、妻は柔良き性なれば、言るゝまゝに諾ひつゝ、近隣の人には過ち顛びて傷つきたりと語りけり、されど夫は情なく未だ傷の癒えざる中に既や其事を忘れしとぞ。

村長が來る少時前に、此家の畜ひ猫が、洋燈を覆へして少許の油を溢しけりとて、クリーヘル一婦を詈り『此の愚物が何として猫の馴を善くせざるぞ、畜生女め、油を覆させたれば洋燈を點すことはならぬぞ、闇所に座り居て牛の糞でも燒くが好い、此の牛馬女奴が』と、いと口穢なく叱り嘖くれば、妻は答も得なさずして涙に頰を沾せり。幼兒等も亦之を見て皆一隅に泣き居たり、折しも戸を敲く音してければ、クリーヘルは靜にと俄に制して睨めつけながら、己が手巾もて幼兒の涙を拭ひ了り、一聲にても啼くときは寸段々に斬り殺さんと嚇し着け、咳一咳なしで徐やかに戸を開くに、村長の立ちたれば、先づ恭しく一禮するにぞ、フムメルは領主の命令を言短かに說き示せば、クリーヘルは聽き了りて『其はいと有り難く悅ばしき』恩命なれといひつゝ、室の内の靜まりたるを聞き濟し、『いざ村長どの、此方へ入り給へ、妻にも此由告げ知らさば、定めて悅び候はん。』

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兩人は頓て内に入り、クリーヘルの僞君子は、此度の恩命を語りけるに、妻はいと有り難く思ひ侍ると口には曰へど、意にぞな嗟歎の聲を發せしに、村長は異しみて問ひけるやう、『内室は何とかせられしや。』

クリーヘルは怒りたる眼にて妻の方と睨めつゝ、『愚妻は此間より少しく病氣の候ふを僕いたく驚きて療養に手を盡せども、未ぞその効驗も候はぞ、村長どの近頃憚りあることながら、御城へ參らせ給ふ時に領主の公へ謝禮を宜しく願ひ奉つる』と膝折り屈めて屬みける。

村長『謝禮は足下自身にて申さるべし、我が預り知ることにはあらぞ。』

クリーヘル『誠に貴諭の如くなり、貴殿に托み參らせしは、此上もなき無禮なりき、只管寛恕を仰ぐにこそ、御城へは一兩日に參上せん、坐ながらにして恩を受くるは人としてあるまじき事と思ひ候。』

村長『月曜日の朝には他の人々も齊ひて御城へ參るべければ、足下も倶に往くこそよけれ。』

クリーヘル『必ぞ參り候はん、又貴君にも特に謝禮を申すなり。』

村長は我に禮いふことかはと、いと不興氣に起ち去りつゝ、次にマイケールとて常に手

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

足の如く使ひて悪事を謀る悪漢の家に到れば、マイケールは村長と見て狎々しく『是は悪魔の隊長、何か做事の候か』と謔れながら出で来る。

村長『少しく足下に聞すべき面白笑可き事のあり。』

マイケールは哂笑ひ、『貴公の如き人物こそ舞踏、婚禮、酒宴に客を集むる使には相應しかりと人皆云はん。』

村長『何はともあれ我が使の旨趣は哀しき事にはあらざるなり。』

マイケール『然らば何事に候ぞ。』

村長『足下は新しき夥伴に入りたり。』

マイケール『シテ其の夥伴の人々は。』

村長『ヒューベル、ルーヂー、リーマン、ロイク、クリーヘル、マルクス、まだ其他にも四五人あり。』

マイケール『其は何と曰ひ給ふや、さる乞食等の夥伴になりて何事をかなすべきぞ。』

村長『ボンナル村なる神の社殿を造るなり。』

マイケール『そは戯言に候はん。』

村長『真實正當の公告なり。』

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

マイケール『されど村中の廢疾と蹇跛を誰が擇び擧げたるなや。』
村長『位尊く威望隆に聰明睿智に在します領主アル子ルの君ならでは、誰か此人々を擇び擧げんや。』
マイケール『領主は白痴に候ふ。』
村長『我如何でか知り得んや。』
マイケール『白痴にあらずして誰か廢疾と乞食を用ひん。』
村長『領主が實に愚昧ならば、我に取りて惡くはあらず、吾は尚ほ用事あり、行くべき先の多ければ、今は是にて別れなん、足下に語らふことあれば、夕刻に我が店に來よ。』

斯くて村長はマイケールに別れ、次にマルクスの家に往きける、此のマルクスといへるは、原富裕なる商人なりしが、家産次第に衰へ果て、今はボンナルの或る法師と、二三の富める親族の慈惠に由りて、親子の者が露の命を繫ぐのみ。斯く貧困に陷りて朝夕飢寒に迫れども、尚ほ人に傲るの心を失せず、惠を受け助を乞ふ人々には困苦の狀を語りもすれ、他の人には己が貧しきを見られじと、外面を裝ひ蔽すことに、只管心を苦めたり、されば村長の來つるを見て、驚き惶て四邊に散り亂れし敗布を捽に集めて蒲團の下に推し匿し、襤褸の衣に半身は裸體に伴した幼兒等を促がし起て、次の間に疾く匿れよ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と命じたり。

幼兒『父樣今日は雪も降り雨も降り風さへいたく吹き暴るゝを、戸障子もなき彼の室に此裝にては耐えらまじ。那の風の音の畏しさよ。』

マルクス『聞き分けなき兒等かな、其身裝にて客人に見られなば、我が耻辱を如何にせん、速く行かずや、身を苦むるは少きもの、業なるを爾等は未だ知らざるか。』

斯くいひつゝ、マルクスは兒等を次の室に推し遣り、はたと戸を閉め、偖て村長を家の内にぞ請じける。

マルクスは村長が使命の由を聞きて、問ひけるやう、『某は此人々の監督と爲されに候か。』

村長『足下は何事を思ひ給ふぞ、足下も他の人と同じく力役者なれば、此工事を請くるとも、又請けざるとも、足下の心に任かすべし。』

マルクス『某は斯る粗劇の工事に慣れねど、アルネル主と法師とが指圖とあるに、其を辭はるは不敬ならん。』

村長『足下が此工事に加はることを背きれしと聞き給はゞ、領主も法師も定めて悦び給ふらめ、アルテル主は、再び我を使として其の喜びを陳べしめ給へん。』

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

マルクス『其が爾いふにはあらねども、雇主の誰彼を問はず、日雇に出でんことと我が志にはあらざるなり。』

村長『さらば足下は食料に事欲き給ふことなきや。』

マルクス『幸にして其は未だ麵包に乏しきことは候えぞ。』

村長『我も左こそと思ひたり、足下が兒等は何へか往かれしや。』

マルクス『我が亡妻の姉なる者の家に往り、今日は彼處にて午餐の饗應ありつらん。』

村長『次の室にて小兒の泣く聲聞こゆと覺し。』

マルクス『否兒等は一人も家には居らず。』

されど村長は尚ほ同じ聲の聞こえにければ、會釋もなく、身を起して次の室の戸を開くれば、半は頽れし室の中に雨と雪の吹き入りつ、幼兒等は風寒くして衣薄ければ、齒の根も合はず、戰慄へて蹲ばみ居たり、村長は之を見て『マルクス、足下の幼兒等は斯る場所にて晝餐の饗應に與るにや』と冷笑ふ。

マルクス『村長どの、願ふは此事を必ず誰にも語り給ひぞ、若し人に知られなば其面を對し難かり。』

村長『足下は物に狂ひしか、何故兒等を呼び出さぬぞ、見よ〳〵寒えて色青ざめ、生き

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たる人とは思へれど、我が畜犬なればとて、斯く殘忍しき所遇なさんや。』

マルクス『さらば皆々此方に出でよ、村長どの、仰ぎ冀くは此事を必ず人にな告げ給ひそ、僕此の如く頓首して只管に願ふなれ。』

村長『斯る無狀でありながら、法師の前に出る時は、蟲も殺さぬ信者と假裝け、前の週は我が家にて醉酗したるを法師の耳に報知せしも足下ならめ、那の夜十二時近き頃、足下が何處でか酒飮みて歸る途中、我が家の前を過りしを我れ確と認めたり。』

マルクス『何で爾る事の候はんや、某の言の眞ならずば、忽ち神罰を蒙りて此處より外に見動きならじ。』

村長『今の言を我が坐る前にて復び法師にいひ得るや。』

マルクスはハタと口噤りて應なし、村長は罵りて、『汝が如き犬猫にも劣りたる虛言者は、我れ未だ見たることあらず』と言ひ放ちて出で去りしが、心憎しと思ふがまゝ、頓て法師の許に往きつ、廚の煮炙をる婢にマルクスが事彼是と一々讒言して告げなければ、婢は之を主人なる法師に告げんと約したり、村長は竊に思ふやう、法師が斯くと聞きたらば、今までマルクスに惠みたる麪包の施賑を止めなんと、人の困苦を打ち喜ぶ心の裏ぞ無慚けれ。されど法師がマルクスに物與ふるは原と其の行を賞むるにあらで、其が貧

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しきを憐むなれば、今此の言を聞くとても、仍ほその扶助をなしけるとぞ。

批評

左の一篇は沼田順義の自ら其の著級長戸の風に序したる文章なるが、序文と見んよりは寧ろ舊事記、古事記、日本書記の批評と見るべきがごとし。評の當否は暫く措き、能く右の三書を讀みしものと覺ゆれば、茲に掲ぐることゝせり。

○級長戸の風繇書

故人　沼田順義

霖雨むれまなきころ、こゝろやすうなれ〳〵しきともちうちつどひ、語りあかし語りくらしつるに、つれ〴〵とふりつゞき、いと閑なる夕、あるは蹶、あるは歌膝し、おのがまにまにゐなならびける。今宵なむからめきゐる物語をばまぜぞ、國史のおもむきさだめせばやとて、種々の史どもをとりで、澤まつみをけり。蹶たるがうちみあげて、かく多かる史どもを定めなんは、宵ながら明けぬる夏れ夜のわざのは、先旧事記、古事記、日本書紀をこそ定むべきなれといへば、皆うなづく。やをらゐなをりつるが、鼻のまたりおこめきてひ、らきゐたり。いかまときまくらんとき、耳ふなれば、わこりがま吹きて、人のおなたか

くうまれぬれば、人にもてかしづかれ、かくる、こともおほく、ゞねんまとのみむひこよなきは古事記なり。もとのまなたかく、生れながら身はしづみ、くらゐみじかくて、人ななきは日本書記なり。さるべきすぢにもあらなきが、かんだちめなどまでなりのぼり、われはがほに家のうちとゝざり、人にをとらじと思ふは旧事記なり。といひもてこぬに歌膝なるが、かいとりて、清御原のきよき御心も、稗田の翁が言の葉にのこりしを、安萬侶大人がふみてにふくめて、三巻の書となせるは古事記なり、故文面はきやびかに美く、言の葉も雅くて俗びず、實ふも上のまなたるべし。博くいにしへを記し、普く故事をつたへ、文面はめやびかなれども、辭は俗びたるもまじり、うふかくにからめきて、いたくいにしへぶりを失へるは日本書記なり。實にも中のまなたるべし。古事記、日本書記、古語拾遺などいへる書ともの辭をそづまゝにとりつゞひて、別書の異説をもまじへつれば、文面もあるは雅く、あるは俗び、條々みれなじからぎて、いさゝかもよつかぬこと、木に竹をつげるがごとく、一巻のうちといふとも、異説をのせて是非とも判たず、理の前に後にそむけるも多くて、時代にもあはぬことさへあるは旧事記なり。かばかりあつき偽書なるに、ひさしく古事記、日本書記にならべてたふとみこしは、さるべきすぢにもあらなきが、かんたちめなどまでなりのぼりたるふひとし、實にも下のまなたるべし。大人

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

が論れ、國學の祖なる本居が定にもかなくれバ、實にもさるべきことにこそといひあひて服がほなり。己つや〳〵うべなはずしていへらく、よく睦びて逆ふことなきは常のまじわりぞうし、こは道にあづかるさだめにし侍れば、大人達にもえこそゝづらじ。なにがしふはおほゝなくれもほせれど、いでこゝろみにさだめばや。道早振神の御代は文字もなかりつれバ、よろづ言傳にことゝづてしを、人の代となりて文字わたりて後に、書とはなしぬ。ひさしく天の益人らが口に耳に傳へ来ぬるともく、あるは曲め、あるは誤り、あるは失ひ、あるは補ひ、異説も澤にいでたにければ、其のふみも種々あり。これ古記舊辭などいへる書どもなり。推古天皇の二十八年といふに、天皇厩戸の皇子、馬子の宿禰に詔まし〳〵て、天皇紀、および臣、連、伴、造、國造、およひ八十部、公民等の本紀をえらバしめたまふ。まづ天皇紀をえらび給てやゝとく、やがて種々の古記舊辭をとりつとへ、硯の海の淺からぬ智もて、そじめをはものしたまへれど、政にひまなくや、自餘をえらびも未しきに、年もくれてあくれバおなじき二十九年夾鐘朔の夜半むかりに、水莖のつゆと消えさせたまひければ、馬子の宿禰もふちころもほしあへぞやありなむ、其の年もむなしく終ひて、同き三十年といふにえらびたゝして、書きとめておりぬ、名つけて先代舊事記といふ、別名は日本帝王記（日本書記には天皇紀といひ）古事記の序には帝

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

紀といひ、弘仁和紀の序にはたゞちに先代旧事記といへり。是をもて舊事記のふるくつくれるをしるべし。かゝれば文面のあるは雅く、あるは俗び、條々におなじからで、木に竹を繼げるがごときは、とりつどへにし本津書とものふみでのあや、おなじからざるが故なり。日本書紀、古事記、古語拾遺などにこの書の辭を全くのせたるは、この書にとりつどへにし書どもの、辭とそがまゝにとまるなり。一巻が中といふとも、異説をのせて是非をもわかさむ、理の前の後にそひけるは、撰まだしきところなり。千年あまり寫傳へたる書にしあれば、あるは經を失ひ、あるはそひがきの經となれる類もあんべくれ、百が一は時代にもあてぬこともあるも、そへがきのまじらひさることにこそあれ。既戸の皇子は勝なる德ましく〳〵て、智もいと深ければ、世には聖人といひもて傳へり、もしなまさかしきこゝろのありて、皇子になすらへ、僞書をしなものせんには、理むべにこそつくらめ、いかでか斯うおろかげに、みだりがはしう時代にもあらざるがことかきなさんや。こゝをもておもはからば、此の書の眞なることをしるべし。とり集へにし記とたゞあるは、博雅君子のまねびの牖になり、あるはいたくひなびたるを乃この、なまくねびなるがものせしも多かりけめを、學の聞えも歌の譽れもなかりし馬子の宿禰がえらびたれむ、文面もいたくさとびて、辭もたゞしからぬを、これ世の歌書の雅言のみもてあろぶ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大人達まであてらる、とおろなり。譬へばもとのしおたかく、やまれながら身はあづみ、位は卑くて人げなれがごとし。これをば中のあなまさだめしつべし。書は道をふくむをもてたふとし、文面なか、つらうことかは、これれのれが旧事記を愛づること、ろばへなり。天武天皇の御宇となりて、天皇詔まし／＼、諸家の齎るところ帝紀（帝王紀をやつしていへるにて即ち舊事記なり）および本辭（帝王紀のもとづく處先代の古記舊辭なり）正實にたがひて、多く虚偽を加ふ、今其の失を改めずば、幾年をもへずして其の旨ほろびん、故今帝紀をえらび錄し、舊辭を討ね覈へ、偽を削り實と定めて、後の葉に流へまくれずぞ、とのり給ひ、大御口づから稗田の阿禮に勅まし／＼、帝皇日繼（帝王紀をいへは即舊事記なり）先代の舊辭（前にいへる本辭なり）と誦習はしめたまふ。（古事記の序）意ふに阿禮既によみうかべければ、もろ／＼の皇子等も皆よくよみたまへり。天皇川島の皇子等に詔りまし／＼て、帝紀および上古の諸事をあるし定めしめ給ふ。（日本紀天武皇の御巻）元明天皇の御宇となりゝ和銅七年といふに、紀の朝臣清人、三宅の臣藤麻呂に詔りまし／＼て、國史とはらべしめたまふ。（續日本元明天皇の御巻）意ふに持統天皇、文武天皇二代を經て、清御原の御書は速にかくれ、阿禮が讀習へる書どものみこれあり。故天皇清人等に詔りまし／＼て、再び國史をえらびしめたまふなれ。元正天皇の御宇となりて、養老二年といふに、和銅七年（より五年）一品舍人親王に勅りまし／＼て、日本書紀をつくらしめ給ふ。（續日本紀元正天皇の御巻養老四年といふに是よりさきに一品舍人親王勅を奉けて日本記を

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

修む是に至ツて功成りて奏上を記三十系圖一巻 意ふに和銅七年の御史の御心にかなはせ給はぞ、故又舎人の親王に詔りまし〳〵、なり。親王は敏賢くおはするのみかは、勝なる徳さへましませば、父なてまたらせたまひし清御原の天皇の御志をつぐばやとて、阿禮がよみならへる書どもをもて經とし、自餘をば一書といひ、博くいにしへを録し、普く故事を傳へ、詳に盡してもらすことなし。文は震旦書にまねびたまへれども、たら和訓とつたへ、いにしゑぬりをうしなそじどつとめたまへり。故字の音をかりて假名とし、條々の、ちにはかならず和訓をしるしたまへり。皇國の史澤ありといへども、よく是にまされるはあらじ、たとへば人のしなたかくうまれぬれば、人にもてかしづかれ、かくなるゝことも多く、じねんにそのけはひこよなきが如し。これをば上の品にさだめつべし。古事記の序に、天武天皇の詔をがせて帝紀を撰録さまくおぼすものから、稗田の阿禮に詔りまし〳〵て、帝王の日繼、先代の舊辭をよみならはしめ給へれども、運移り世異にして、未そのことを行そざりしを、元明天皇の御宇となり、天皇和銅四年といふも、正四位太安麻呂に詔りまし〳〵て、阿禮がよみならへる紀どもをしるして奉らしむるといへり、舎人の親王日本書記を撰びたまひしは、養老二年にて、和銅四年より八年こなたなれば、親王かならず古事記と視はすべき理なり。既もみそなはしたらんには、天武天皇帝紀とえらびしるさまくお

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ほをとのりたまへる詔の事をば、おこなひ給はざりしをしるべし。そをしりなば、日本書記天武の御巻十年といふに、川島の皇子等にみことのりまし〳〵て、帝紀および上古の諸事をしるしさためしめ給ぬなり。もし已に帝記をえらばしめ給ひつれども、御心にかなはざりしをもて、ふたゝび詔りまし〳〵、とならば、詔にはむゆる帝紀は自家の帝紀なり、諸家の齎をところとのり給むん理やはある。かゝれば詔りまし〳〵は、川島の皇子等に帝紀をしるさしめたまひしよりさきつかたなり。こゝをもておもへあれば、親王古事記をみそなはし給はぬこと明らけし。まいて日本書記引くところ一書といふも、おほぞう舊事記の文にて、古事記に似たるはいと〳〵まれなるをや、百が一つ古事記に似たることありといふとも、され古事記のもとづきし古記なりかし。續日本記、安万侶氏の長たりしをしるして、古事記をつくりしをいはず。和銅七年に記朝臣清人等に勅りまし〳〵しをば載せて、和銅四年のは見えず、こと真道の大人もなほ古事記を見たまはぬなり。和銅四年のはうち〳〵の詔なれば、世にしられざりしなどもいふめれど、そは證もなき妄言なり。國史をえらばしめたまふは天皇の功にして、御代の譽なるに、かくしたまふ理やはある、たとひ詔は世にしられずとも、古事記をだに見たまはばなどかしるさゞらむ。意ふに天武天皇の詔をしるせる書もありしによりて、安萬侶

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

になぞらへあまたかしきさのこのほくりいだし、僞書なりにならし。さうはあれど、弘仁和記の序ふもひきつれば、大くだれる書にもあらじ。國學のわざにもくらからぞ、しきしまの道にもあきらかなり、その文面はみやびうにしてうるはしう、辭も雅なり。してきとびを、これ世の中の博正君子たちにもめでらる、所なり。譬へばさるべきすぢにもあらなきが、かんたちめなどまでなりのぼりて、われはがほに家のうちをかざり、人にをとらじとおもへるがごとし。こゝには下のしなにさだめつべし。老聃が蹟をしたひ、荘周がながれを汲みつるとのこそ見えて、自然なるさまをのみたふとぶから、其撰も道々しきことゝばえぶき、としへがましきことをばのぞきぬ。故古事記によるとたは神の御代には道も教もなかりしがごとし、そがうへ帝紀本辭の譬喩をもえさとらず、天照太御神、月夜見の尊をば、神漏岐、神漏美の二柱、交合してうみたまふ、てふ、たゞしき傳をばしらぞがほに、神漏岐の御眼をあらひたまふにあれましし、といふ妄言をしも經として、天神の次ふたつに高皇産靈神皇産靈神をなるせるだぐひ、その誤をいひしてかぞへば、兩の手の指にもあまり、あしびきの山鳥の尾のしだりをの、ながものがたりともならなむ。書も道とのせてこそたふとまれ、たとひ文面はうるはしくとも、道をし傳へざらむには、あたかもたはなるをうなのいろどりかざれるがごとし。これおのれが

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

古事記をうべなはざるこころばへなり。本居宣長もなべてならぬ人にはおはすめれど、いたく歌書の言の葉を好めるをもて、文面のうるはしきにまどひ、言の葉のさとびざるを愛で、こよなき書ぞとおもひあやまつから、傳をさへつくりてほめとふとみ、自餘をおとしめことて、舊事記、日本書記さへいひけつめり。むげに古事記をのみうべなふから、日の神の傳へたまへつる道をもえまきまつぞ、神の御代には道といふ言擧げもなかりつれば、神の道といひて受行ふべきわざありなんや、などいひ、神代には道もをしへもなかりしがごと、いひまげて、日の神の徳をしもおとしめ、久かたの天の縦したまへる聖人達をもいひおとし、おとろへたる世のつゝましきならはしをしもいひいでゝ、從母を御妃とし、異腹の妹を御妃としたまひしも、皇神のたゞしき道なり、とねもなきうきくものかきたる妄説をいひもてひろめ、天が下をくらませり、孰か是れをかなしまざらむ、孰かこれを歎かざらむ。故その雲をふきはなたむや、とく市川のきよきながれに、萬我比禮ふりて、川風をおこしにけれど、いとひらかるから、いたづらに眞砂ふきたて、なか〳〵にくらく、遠近のながめもわづかなりければ、つちはふ葛花もまれはがほなり。おのれうれたくおもほゆるから、級長津彦の神、級長戸邊の神に祈請ふて、神風おこさまくおもふなり。大人たちはいかにおほすらむ、とうちみやれば、いつしか級長戸のかぜの八重

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雨雲をふきはなちて、月の御影あかくさしいれたり、ほどなう夜はのあけぬれば、大人達もまうでまゐり。やがて豊榮のぼる朝日の牖に、眞毘靈、萬我の比禮、葛の花の三つの書をとりつどへて、くだり〳〵に論ひたゞしにき。

文政十あまり一つおとし子の夏、沼田順義阿肥の樂水堂にて撰。

○我國婦人女子の地位改良を論じ併せて歐米婦人女子の狀態に論及す（添田壽一氏講演東京日本橋區大傳馬町二丁目大成館發行）

まづ日本婦人の地位の改良に就いて精細に立論し、次に歐米婦人女子の有樣に就いて其の利害を緻密に探求し、終りに女子敎育の心得五十條を附錄として添へてあります。要するに新奇と思はれる處、名論と思はれる處はさしも御座いません。

○小說叢第一號（小本一冊定價金十錢東京々橋區元數寄屋町一丁目三番地小說館發）

都の花が一度現れまして、大和錦、小說萃錦、新小說など、續々小說雜誌が出ました。新著百種が出まして、又、小說文庫が出て、今また小說叢が出で、踵を接いで一冊讀切の雜誌が出る勢になりました。ですから小說叢は讀切雜誌の二番鎗と自分から言ツて居りますが、實は三番鎗です。それは兎に角、用紙も印刷もまづ〳〵美く、是れで表紙の体裁

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と挿畫が、モ一層宜ければ申分のない立派な雜誌です。肝腎要の揭載してある小說は如何かといふ母、第一は右田寅彥氏の時代物院本「平家姫小松」、近松武田の院本を讀まない人には容易ならざる傑作。第二は淚香小史の世話物「無慘」是れも西洋の面白い探偵小說を見ない者には非凡の傑著。まづ〳〵一讀の價値は充分あります。

○北陸婦人教會雜誌（石川縣金澤西町三十六番地北陸婦人教會本部發行）

佛教乃主意に因ツて婦人の要務を教へるもので、地方には先可成な雜誌です

○色界の燈（松のやみさを著小本一冊八十六頁定價三十錢大坂東區谷町一丁目大和屋發行）

戀愛哲理色界之燈といふ題名から見て、餘程猥褻なものと思ひましたが、讀んで見ましたら、ナに左程でもありません。まづ色情の總論から、色情の發育及順序を說き、色情は亦人類の義務なることを說き、戀情の起因を說き。戀情の障碍を說き、次に一夫多妻、次に娼妓と藝妓、次に情死、次に婚姻、と漸次に說き及ぼして、第十二章を以て結論としたものです。式亭三馬の「生醉に所を兎けむ寢々は」の歌は、斯る書物を評するに適當なるものでせう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雑録

○伊勢大輔の話

衛遠樓主人

大中臣能宣の孫にして伊勢の祭主輔親のむすめなるゆゑ、伊勢の大輔とよびたるなり。また上東門院の女房にて、歌よみの名いとたかゝりき。大輔はじめて中宮に見えしときに、關白道長坐ありしが、たまく奈良の八重ざくらをたてまつりたるものあり。道長、硯と筆とをとり大輔にさづけて歌よめ、といふ。大輔たゞちに、

いにしへの、ならの都の、八重ざくら、けふこゝのへに、にほひぬるかな、

とぞ詠みける。歌のこゝろは、今はむかしになりたる彼の奈良のみやこの八重ざくらが、今日この九重の君の御前ににほふなどかな、と此の花をほめてよむうちに當代をほめたてまつり、いにしへのといひてけふとうけ、八重といひて九重とうけたる處、げにをもしろし。玉のこゑこがねの響ともいふべけれ、斯かるうたをこそいふべかれ。大輔其の後筑前守高階成順といふ人の妻となられたるよし、後拾遺集に見えたり。また宇治大納言物語に、伊勢のたいふ越前守にていみじうやさしき人の妻になられしが、あひそめしころ夫の石山へこもられて音信のなかりしほどに、よみてやらせける。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

見るめこそ、あふみの海の、かたからめ、ふきだにかよへ、しがのうら風。

とあり。此の歌は近江の湖は海松や和布が生へぬゆゑ、それによせて、近江の石山へきたる人にあひ見る目はかたからめど、志賀の浦風なりともふきかよひて、夫の音信を聞かせよ、といふこゝろなり。一首のさま亦尋常のものにあらず。此のうたをよまれしのち其の夫のなさけ殊更にまさりて、子孫もさかえしといへるが、實にさもあるべきことにこそある。彼の六條の大貳、堀河の大貳などいふ人は、みな此の大輔の孫なりといへり。此のものがたりに、越前の守とあるは、後拾遺集の筑前のかみとあると同人なるにや、また別人なるにや、或は宇治大納言物語の書きあやまりたるにてはあらざる可きか、なほかんがふべし。

○婚禮の時の秋の字

婚禮の時に秋の字を忌むは「あきいとふ」の意なりといふ。伊勢流の書法にも婚禮の狀には、千秋萬歳とかゝずして、千春萬歳と書くといふ。此說信じがたし。唐土にては中宮を指して長秋宮と號す、後漢書に曰く、大長秋一人二千石掌レ奉ニ宣中宮命一云々、注師古曰、長恒久之義、秋收成之時、故以爲ニ皇后宮之號一云々。是れにならひて日本にも皇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

后付の公卿殿上人の官名、唐名にて書くときは長秋とかくこと今以て其の通りなり。俊成も皇后の太夫たる時の歌に、

雲の上、はるかにてらす、月かげを、あきの宮にて、見るぞうれしき。

是れ皇后の御所にて月と見ての歌なり。秋の字を忌まざる知るべし、と或る古書に見えたり。兎に角むづかしき議論にこそ、啻に秋の字のみならず、日本の舊禮には婚姻の時にさるといふを忌み、紫を忌み、歸るを忌みて開くといひ、お茶といふを忌みてお湯といふが如き、枚擧に暇あらず。いかにも馬鹿〳〵し。

○人丸の装束、業平の装束、菅公の装束

人丸の画像の事、装束常と別にて古来様々の説あり。画家杯にては傳とするよし何の事もなき冬の直衣なり。冬の直衣といふは、表は白綾、裏は淺黄の絹なり、袖口の裏へ半幅表を折りかへしておくなり。古の画工あまり丁寧にすぎて、袖半幅は折りかへしたる裏の色と共に白く畫き、袖より奥は半そへを見せんとて、うらの淺黄を表へうつし見せたるものなり。今の画工誤ツて一向淺黄に画く。又業平の画、たゞ淺黄に画く、是は夏の直衣の圖なり。夏の直衣は淺黄のひとへなり。まさ菅公御自画の像とて、所々

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

はあれども大方黒き袍あり。其の時代黒きは橡とて喪服なるうへ、四位以上の黒き袍を着せらるゝこと、延暦より後の事まであるは、菅公なんぞ黒き袍ゐかゝせたまそれや。且此の頃の袍は袖もちいさくたちたるものはあらぞ。今世の装束を見て書きたるものの故、今様の装束、しかも黒々とまで……是を菅公の御筆と披露せむ事、千古をあやまるまざならん、と同じく或る古書に見えたり。

○餘興　　傍若無人樓主

○芋と蓮「お母さん、そら食物からね、糸がでてると、そりやアもう腐ツてるんですね。」「さうだよ、糸が出ると腐ツて居ます、もう食べられないのです。」「今日ね、今ね、叔母さんの處へ往ツたらね、午飯を出したんでをよ、さうして芋と蓮の煮しめを出したんでをよ、芋を食べて見たら、もう糸が出ますの、蓮を食べて見たら矢張――甚く糸が出ますの、それから妾は少しも食べなかツたわ。」

○うんにや　主人新しく雇ひし山出し下女に向ひ、「れ前は年は幾歳だ。」「年かね、年は妾ア廿歳ぢかくでござらア。」「なに二十歳近く……馬鹿をいふな、もう二十三四じアないか。」「うんにや、廿歳ぢかくで御座らア。」「それじやア幾歳だ。」「二十四

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

で御座らア。」「そを見ろ、二十歳近くてはないや。」「うんにゃ、二十歳近くでござらア。」「何故。」「何故ッて、二十四だもの、三十に近いが二十に近いッていば、矢張二十歳ちかくでござらア。」

○考物＝大　間　違　ひ

前號ではとんだ大間違ひで、とんだ大間違ひの考物を出しました。乃ち

いる時にいらなくッていらない時にいるものは何？

といふ考物を出しました。が、是れは全く大間違ひで、此の考物なら以前に親爺集にも出「いらつめ」にも出、且古いものですから、誰にも當りませんが、實は左の通りのを、活版屋の字拾ひ小僧が間違ひたのです。（字拾ひ小僧曰く何でも間違があると僕等に冠せやがるチエツ字拾ひは嫌な役だ）どうか最う一應諸君の地球大の智慧袋で考へて見てください。

○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。

いれない時にいツて、いれる時にいらんものは何？

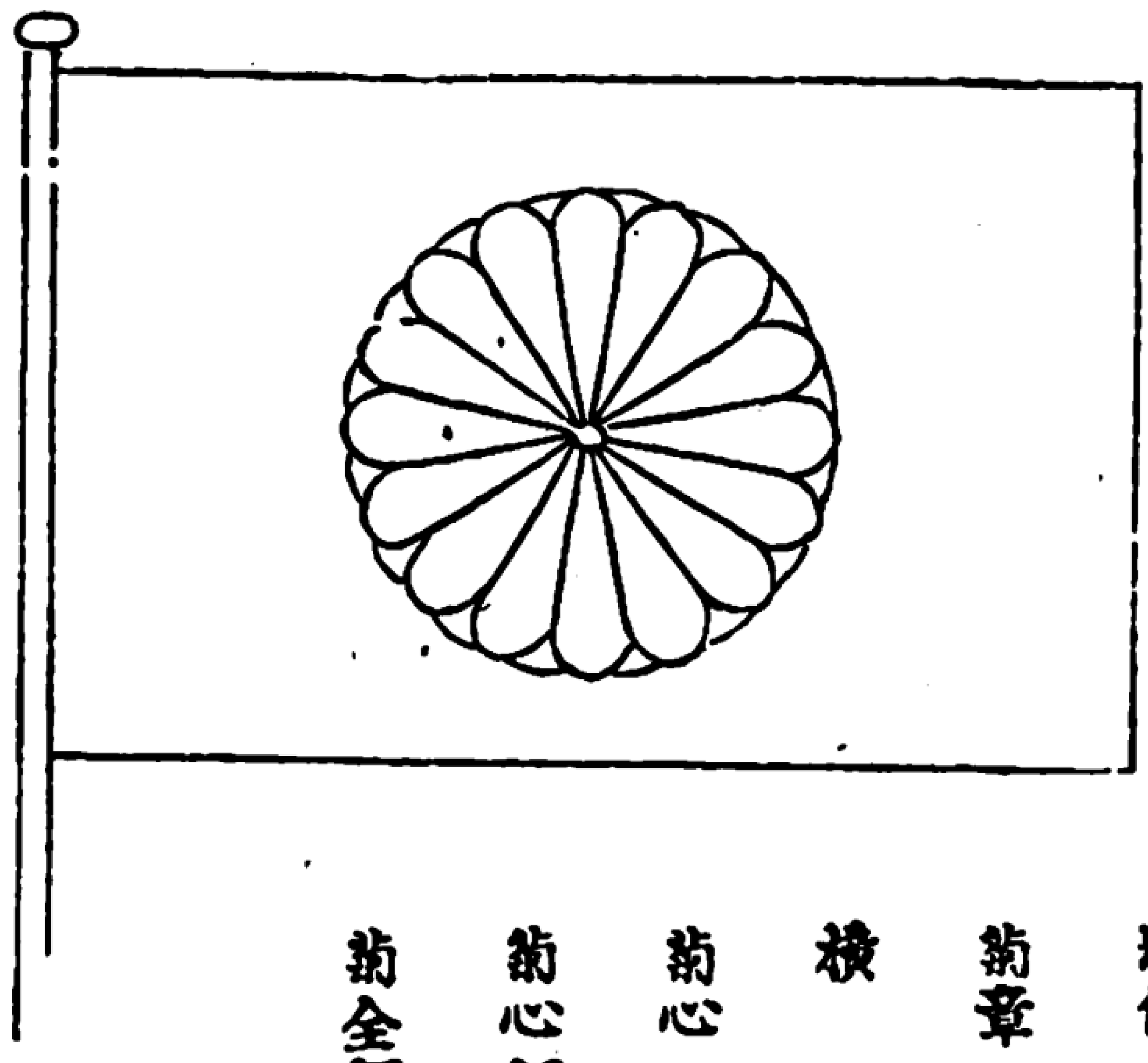
右御解答の御方には、例に依り本誌一冊進呈。前號の考へ物をお當てになツた方にも一冊づゝさしあげまするのですが、右の譯合ですから御勘辨をねがひます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彙報

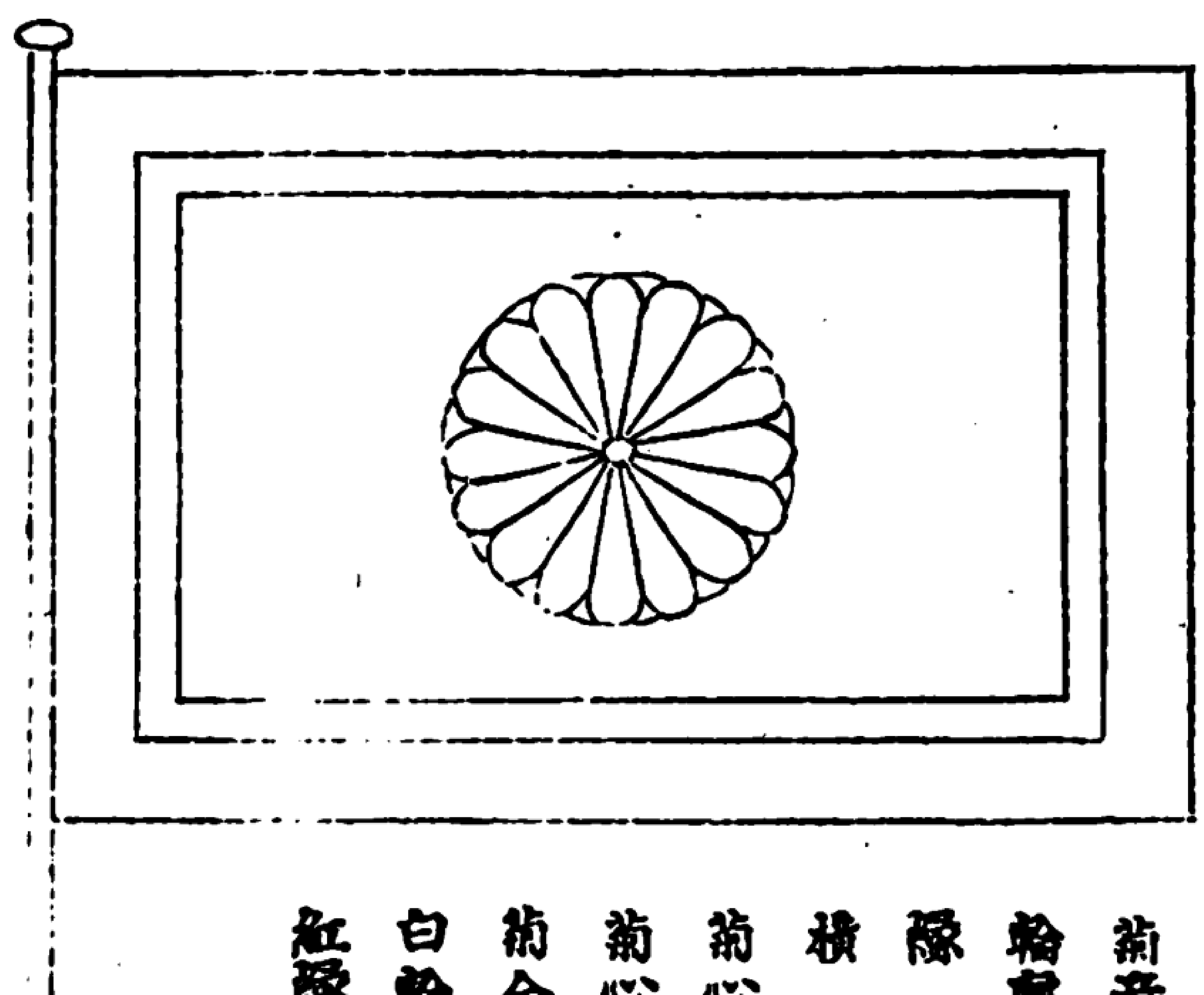
○此の度宮内省達第十七號を以て天皇旗皇后旗皇太子旗親王旗左の通制定されたり

天皇旗



地色	紅
菊章	金
横	縦ノ一ト二分一
菊心	旗面ノ中心
菊心徑	縦ノ十九分一
菊全徑	縦ノ六分四

皇太子旗



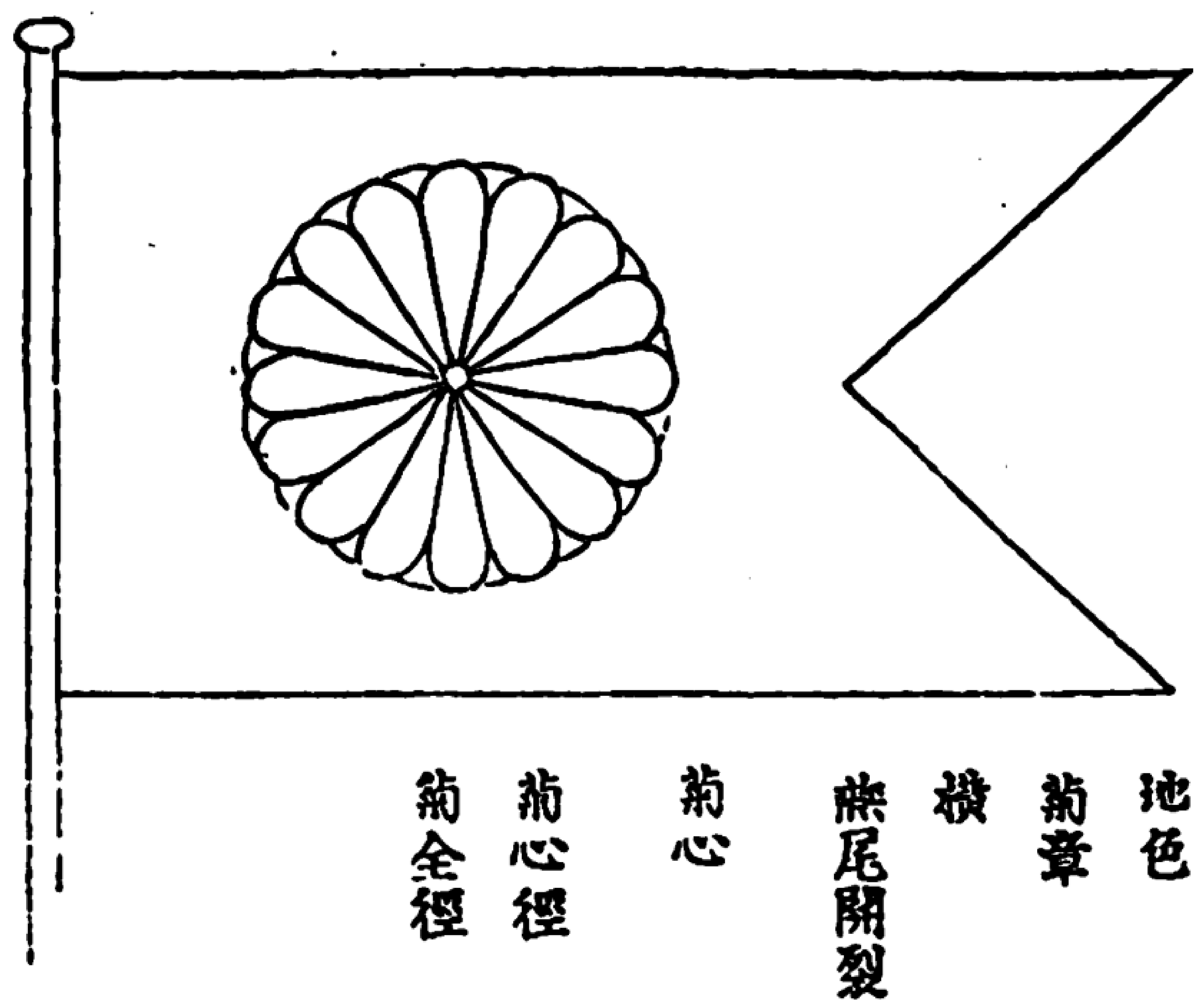
皇太子妃ノ旗亦同シ

地色	紅
菊章	金
輪廓	白
縁	紅
横	縦ノ一ト二分一
菊心	旗面ノ中心
菊心徑	縦ノ二十六分一
菊全徑	縦ノ六分三
白輪廓	縦ノ十五分一
紅縁幅	縦ノ十五分二

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后旗

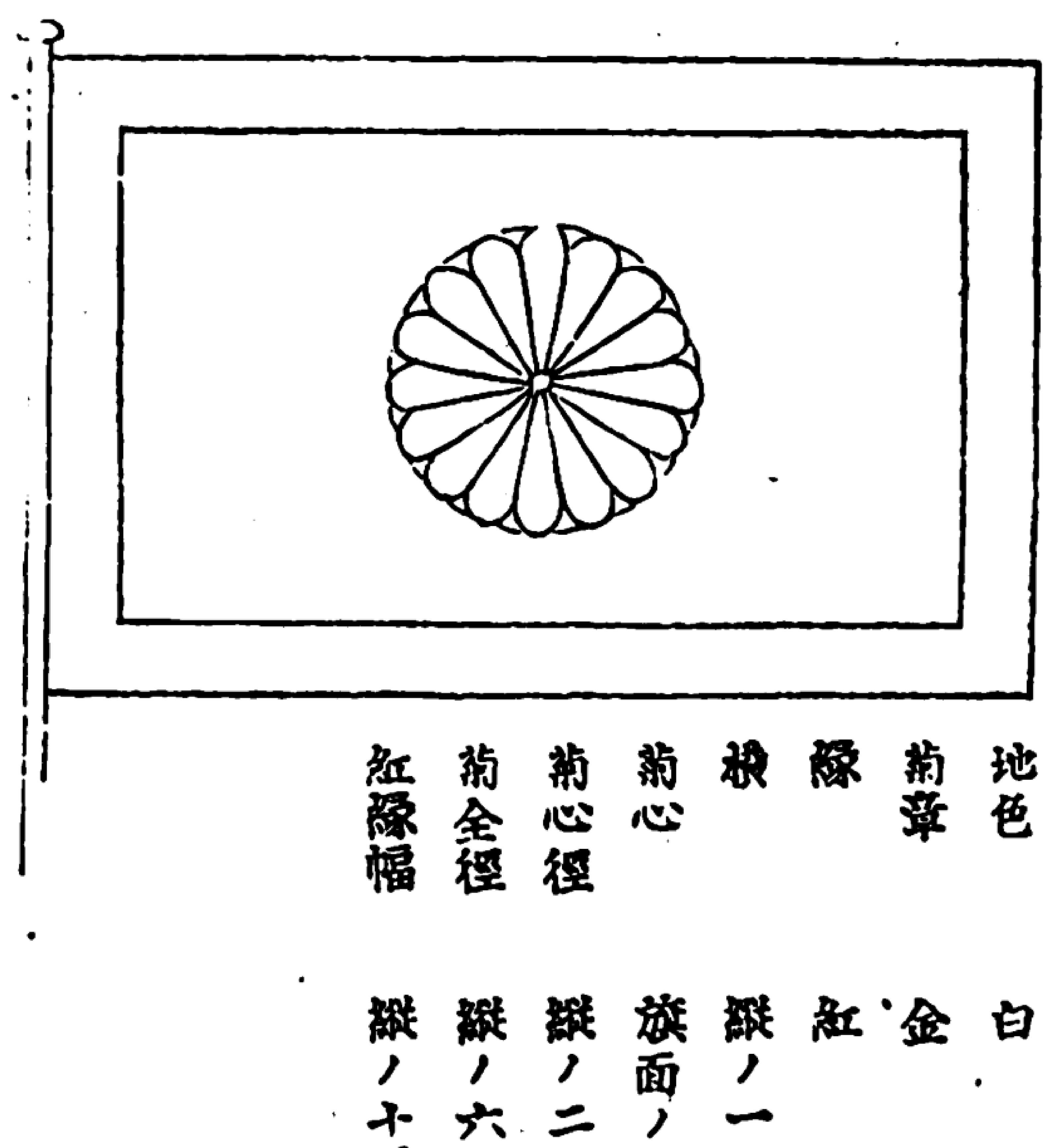
太皇太后、皇太后ノ旗亦同シ



地色	紅
菊章	金
横	縦ノ一ト四分三
燕尾開裂	横ノ三分一上下等分
菊心	燕尾ヲ除キ旗面ノ中心
菊心徑	縦ノ十九分一
菊全徑	縦ノ六分四

親王旗

内親王親王妃旗亦同シ



地色	白
菊章	金
縁	紅
横	縦ノ一ト二分一
菊心	旗面ノ中心
菊心徑	縦ノ二十六分一
菊全徑	縦ノ六分三
紅縁幅	縦ノ十五分二

○皇太子の冊立　承る所に依れば来十一月三日即ち天長節の佳辰に於いて、皇子嘉仁親王明宮殿下を以て皇太子に冊立するの宣下あるべしと。謹て按ずるに殿下は明治十二年八月三十一日に御誕辰あらせられたれば、本年正に御齢十二年に給らせたまふべし、然り而して我が三千八百万の國民夙に殿下の英明活潑なるを知り奉れり。今や皇太子に冊立あらせられんとす。誰か之を敬賀し奉らざるものあらんや。

○日本美術協會　の列品館増築の儀、聖聽に達し、忝くも御手許より金千五百圓、兩皇后陛下より金五百圓下賜の特典を蒙りしを以て、此の恩賜金を基本とし、殘額を募集して速に起工の手順を運らし、聖恩の忝なきに答へ奉らんと、會頭、頭會頭より増築費募集

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

趣意書を六百六十餘名の會員に頒布せりと。

○改良演藝會　日本橋區蠣殼町三丁目なる同會館の開會式は、去る五日は紳士、株士、各新聞社員、六日に皇族、大臣、華族、官吏を招待し、接待委員は澁澤榮一、大倉喜八郎、矢島作郎、太田賢の諸氏外十一名、相談役及び監督は横山孫一郎、外二氏、諸藝掛は新場の小安、館中給仕はよし町日本橋の藝妓三十名にて立派に執行せりと。或人曰く兎ても出すならモ少し藝妓を數多く出したかりし、モ少し面のよき藝妓を出したかりしと。　蓋し紳士連の會式を知らざる者の言なるべきか。

○彫刻展覽會　失望を土産の戻り途に、態々記者を訪ねて愚痴をこぼせし老人あり。其の小言は二三新聞紙の傳ふる所とほゞ同様にて、やはり觸れ込みの大げさなりし割合に痛く買ひかぶツたりとの不平なりしが、此の老人もとより希臘羅馬の神を知らず、名工の名も知らぞ、泰西美術の沿革傳統などはそツちのけにして、唯東洋目鏡をかけて一覧しさる上の評なれバ、直接の批評とては何も斯うといふ程の事も聞えざりしが、坊主をそづれて袈裟に及びたる議論は、老人の説としては稍めづらしありき。「彫像といひ、花瓶といひ、何れを見くも一様一式にして、變化の度合の狹きは寫真主義とうの餘弊なるべし。」「硝子の菓子皿の如きは規正なる彫刻摸様を置きて、為ゞ光線の屈折とか反射とかによりて、一日粲然たる美觀を與ふるもの、外は、純白なるもの、光澤あるもの、或は透明なるものを取りて、之に彫刻を施すは甚不得策なり。」「人像もしくは禽獸草木に限らず、すべて意味のある彫刻物は目に入ること確實ならざれバ其の甲斐なし、即ち純白なるもの、光澤あるもの、透明なるもの等は、其の質うつくしすぎて却て人目を眩じ、たま〱以て技術の妙を蔽ふに足るものなり。」「故に純白よりは淡色が宜しく、光澤は弱きを貴び、透明よりも半透は優り、半透も無色よりは有色を佳とす。」「之を思へば貴重なる玉石を彫刻するは要なきこととなり、下手かくしとはいへ野暮の至りなり。」「併し大体の結構が通じて宜しきは、西洋彫刻術に取りて爭ふべからざる乃長所、　わが國の凡工が局部に偏して全体を誤るが如きな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かりのなき所は、さすがに感心々々。」と、是きはこれ教育週報第廿四號に掲載しある所なるが是等の愚痴をこぼせる老爺なか〳〵話せる人物の如し、窃に其の年齢を或人に問ひたるに、百歳より減ずる七八十歳なるべしといへり。

○眠り覺めたり『嗟呼眠れる耶、平生鹿鳴館にて慈善會を開くの貴婦人は眠れる耶、義侠多愛なる婦人矯風會員は眠れる耶、基督教徒は如何、爾等は平然として慈を說き、愛を說き、天國を說き、極樂を說き、而して爾等の同胞の爾の眼前に絕泣嗚咽するを聽かざる耶、何ぞ大擧して、何ぞ全力を鼓して、何ぞ爾等の至誠惻怛の血淚を揮ふて、全國人民の義侠心同感情に訴へざるか』と或る人は大聲疾呼して、震災水害救恤義捐を促せり。此の大聲疾呼に依りてか、依らざりしにや、兎に角彼等は長眠を一覺せり。乃ち左の如し。

○佛教徒の救恤義捐金　去月廿三日彼岸の中日に於いて、築地本願寺に執行せる水害死亡者追弔法會、幷に羅災者救恤義捐金募集演說は、折惡く小雨降りしにも拘らず、彼の大建築に溢る、ばかりに群參ありて、當日の義捐金の上り高は百三十二圓十七錢五厘なりしが、其他令女教會九月例會參詣中より金廿九圓三十錢、白蓮教會より三十二圓十五錢を合せ、總計金百九十四圓六十二錢五厘を、去月廿六日京都本願寺內の救恤係へ送附せり。

○佛教徒の義捐演說會　佛教徒は去る六日、七日の兩日午後一時より厚生館に於いて水害救恤佛教大演說を開きたり、其の辨士は原坦山、大內青巒、髙志大了、古谷日新、井上圓了、佐治實然、島地默雷、大橋素六郎、小栗栖香頂、西鄕久道、吉谷覺壽、辰巳小二郎、奥田貫照、棚橋一郎、村上專精、土岐善靜、平松理英、田中智學、寺田福壽、守文文靜、脇田堯惇、中山理賢

○基督教徒の義捐音樂會　東京婦人矯風會にては、去る五日義捐音樂會を厚生館に開きたり。其順序は演說（無形の紀念は不朽の紀念なり）島田三郎、歐洲樂隊、音樂合奏、盲啞學校生徒、バイヲリン、歐洲樂隊、清樂合奏、琴三曲（小督の曲、松竹梅の曲）山勢松韻、劍舞（テニソン拔刀隊進擊）少年三人、曾我、吉永孝策

○貴婦人は如何　斯く皆長眠を攪破し來ツたるに、貴婦人は如何、嘗て喋々として慈を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

說き愛を說きたる貴婦人は如何、嘗て屢々鹿鳴館に於いて慈善會を開きたる貴婦人は如何。踏舞會を開くの時にあらざれば慈善會は開く能はざるか、舞踏會を開かざるに依ッて又慈善會をも開かざるか慈善會と舞踏會とをして常に併行せしめんとするか

○牝鷄教育　日本記者曰く、近來獨逸國に於いては女子教育の事大に人の注目せる所となり、學問したる少女は嫁入りも六か敷き傾となれり。又從來電信局、郵便局其の他の技手として教育したる女子もあれども、矢張其の結果の惡しきより、今は殆ど此の種の女性技手を廢するの傾となれり。學校教師も亦ツマリ男子に非れば不可なり。獨逸が數十年間女子の教育に種々工夫を用ゑ、色々經驗したる後に此の結果あるとし見ては、女子教育の事は一層此の際に細心して、他日噬臍の悔なき樣にしたき者なり。朱冠黃脛、雄姿ある牡鷄を造るは必要なり、牝鷄を教育するは何國も人の好まざる所なりと。或人は嘗て女子教育の困難なるを說けり、然れども女子教育の困難なるにあらで、女子教育の程度を發見するに困難なるなり。

○賄賂事件　賄賂事件の火勢は炎々猛々益々盛んなり。阿房宮の火吾人之を見ず、想ふに此の焰勢には夐かに及ばざるべし。然り而して其豫審の公判は已に愈々終結したり、福地氏武藤氏は幾多の妓樓の主人と與に偽證の證憑充分なりとして、輕罪裁判所に移されたり。嗚呼我が國の堂々たる紳士は、女郎屋の亭主と首を駢べて縲絏に繫がれたりと聞いて、誰か我が國の爲に潸然たらざるものあらん。

○滿目皆秋　天地秋風に入ッて、滿目皆秋なり。秋夜蕭々秋雨ノ聲、枕上燈下夢難レ成シ愁緒萬端將レ告ント誰ニ、臥床展轉秖自知ル、蟋蟀三更鳴テ不レ罷、坐ニ疑フ仔細ニ解スルカト我心ヲ。

廣告

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社告

文明之母愈々盛運ニ相向ヒ候ニ付次號ヨリ毎月二回ノ發兌ト可致候其委細ハ附錄ニテ御覽被下度候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋學會雜誌

第三編第九號目録

論説
歴史國語ノ話……小中村清矩

史學門
辨孔子刪詩之非……椿蟠
支那史學一班……周室の起源……市村瓚次郎
辨妄……山縣昌藏
編年史科蒐集復命書……星野恒

文學門
須多因氏講義跋……丸山作樂
高嶺のあさひ……松廬主人
行路柳
其他歐數首……藤井行麿

寄書
井上毅氏の漢字製作論を讀む……承前……高宮止
民の烟と見て……北海散士

雜録
●近代實暦甲戌元暦の撰修せられし時の始末一班●大内裏遺跡の古瓦●今の人力車より前人力車あり（洋々社談）●伊勢山田通信●京都の國典學會●本會幹事林氏送別會●東京學士會院演説

會告

九月二十八日發行

發兌定日毎月一回廿八日定價一冊金八錢六冊前金四十五錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓六十三錢府外郵税金五厘金三錢金六錢金十二錢御註意御註文ノ節ハ○府、縣、郡、區、町、村番地、姓名、等詳細御申込ヲ要ス○御轉居ノ節ハ新舊所御報知ヲ乞フ
○本誌ハ前金ニアラサレハ遞送セズ○見本ハ郵券九錢ニテ呈スヘシ○代價ハ郵便爲換ナレハ芝口郵便局ヘ御振リ込ノ事○前金相切レナハ直ニ遞送ヲ止ムヘシ

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
發行所　東洋學會

賣捌所　東京日本橋道一　大倉●小石川大門町　青山●神田佐柄木町　東海堂●京橋三十間堀　良明堂●大坂心齋橋　松村●京都河原町　大黑屋●靜岡新通　勝見●水戸上市　川又●下總佐原　正文堂●崎玉鴻ノ巣　長島

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●數理會堂第十號 十月八日發行

本誌一冊定價拾錢切手代用拾二錢必前金遞送無料常ニ初會ヨリ御需用ニ應ス且本社ヘ御注文ノ分ハ發行日(イ)便ニテ發送ス

論説 暗算ノ上進普及セシムル丁ニ付テ(社說) 直線ノ定義ヲ論ス(片岡珸光) **數理** 自然數ノ性質ニ付テ(神保長致)略近數(安西卯太郎)實用代數學(信谷定爾)無究級數二個ノ相乘積(遠藤政之助)四則ノ諸原理及其諸例(林田民三) **教授** 算術ノ問題ヲ解スルノ一便法(馬場次真) **問答** 答及解七十四題●本年九月第五高等中學校第一高等中學校東京職工學校理科大學簡易講習科入學試驗問題共計六十三題課題四題 **特別解義** 本年九月第一高等中學校入學試驗問題算術代數幾何甲乙丙号ノ解義(其大家撿閲)農林學校豫科入學試驗問題代數訂正解義及幾何學解義(多々羅恕平君談話)東京職工學校入學試驗問題算術解義(該校教員某君撿閲) **雜錄** 第一高等中學校入學試業數學科細目●雜錄子罰俸ニ處セラル●活潑暗算●三次方程式ノ話(三輪桓一郎) **新報** 第一高等中學校入學志願者ノ注意●外七件 **寄書** 第一高等中學校入學試驗問題ヲ研究ス

●數學書生 初号十一月十五日發行●本誌一冊定價三錢切手代用三錢五厘必前金遞送無料

本誌ハ卑近ノ數理及問答等ヲ掲載シ少年諸君ノ良友ニ供セントス

東京本郷弓町一丁目一番地中條澄清方

發行所 數理社

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

●男女戀愛の標準殊に獨寐のづき〴〵を慰む一大快絶の新奇書

版權免許　半痴半點生題字　松の屋みさを君著　出版落成

戀愛指理 色男之燈

洋装最良美本一冊正價卅錢
出版披露の爲め三千部限
特別金二十錢にて御求に應ぞ府外郵便税四錢●切手代用は一割增

此の書は風流の意匠と才筆の艶麗とを以其名の高き松の屋みさを先生が男女戀愛の情理を實際的の眞説に加へ詳論極悉したる者にて色海更に情波を籠め人をして快樂の佳境に彷徨せしむ蓋し其奇趣妙味と弄ぶは讀者の專有にあり

（書中目次）

第一章色情總論●第二章色情發育及順序●第三章人類の義務●第四章戀情の起因　第一皮想より起るの戀●第二金力より起るの戀●第三才藝な起るの戀●第四閨情より起るの戀●第五一時の感激な起るの戀●第六親切より起るの戀●第七意氣相投ずるより起るの戀　第五章戀情の障碍　第一男女間の不權衡●第二女の男に優れ第三疑心深きこと●第四白慢の深きこと●第五女の浮氣なること●第六思慮なきの戀なること●第七夫妻間の同体異心なること◯第六章一夫多妻論●第七章娼妓と藝妓◯第八章情死論●第九章婚姻論●第十章交合論●十一章架空的の戀●第十二章結論

發行書林
大坂東區北濱一丁目九十七番地　先進堂
東京々橋區銀座二丁目十四番地　日新館

特約賣捌
南傳馬町二丁目　目黒支店
神田南神保町　若菜書店
本町二丁目　中外堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●知識

毎月一回○一冊定價七錢○外ニ遞送料五厘○一切割引ナシ即チ五部三十五錢○十部七十錢○前金ニ限ル○郵券代用一割增○一錢切手ニ限ル

○爲替ハ田名部局宛○受取人陸奥國下北郡田名部學友會ト明細記入之事

●知識ハ載スル所專ラ各料學藝ニ係ル博士大家ト詩談論說及實驗發明改良ノ諸事ニ至ル迄。尤モ有益ナル新報ヲ集載スベシ。間々亦適切ナル批評。斬新ナル小說。及新詩時曲等モ集録シ。讀ム者ヲシテ文學ノ趣味ヲ知リ實業ノ重ンスベキヲ知ラシメントス。而シテ其材料トスル所。全國數千種ノ雜誌新誌ニ付テ。學藝ノ精醇。文學ノ美華。最モ正確ニ。明晰ニ。鮮麗ニ。爽快ナル者ヲ撰拔スベシ。思フニ「知識」ハ該博ナル學者ノ咳唾ニ成リ珠玉ヲ以テ其紙面ヲ填充シ爛然燦然知識ノ光華ヲ放チ。將ニ明治ノ新世界ヲ照ラサントスル者ナリ

第一號目次

○知識 公道ト人情●道德ノ本心ヲ論ス●我國古代ノ人民ノ世界開闢ニ關スル意想●青年學生ハ何ゾ故郷ニ歸ラザル奚ゾ田舍ニ遊バザル●真正ノ進歩ヲ論ジ併セテ佛教家ニ望ム所アリ●宗教家養成ノ二策●進矣青年書生●日本ノ商人
○文苑 文二篇●詩二首●歌二首●寓言一則●
○小說 梓弓●小言第一回初音
○雜錄 ●學校蓄金法●世界無雙奇異桂時計●昆蟲ノ多限●他三件
○廣告 數十件●會告數件
終

○紙數毎号六十ページ余中本なり見本郵券一錢八枚

發行所 陸奥下北郡山名部小川町 學友會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

我行道第十四號

明治廿二年九月二十日發行

我行道目次

講演

●寺院の經濟如何（第二回）

●真宗安心の大意……（承前）……松島善譲

●因果應報ノ辯……（承前）……渡邊南洞

●倶舍論答問……（第八回）……藤井玄珠

論説

●宗學を振起すべし……呉江道人

●社會改良の方針……（第六）……

●進動元素と固著元素……山田一郎

●如何ヿして攻め如何ヿして防ぐや……土井義雄

雜録

●玉日君御遺狀●僧俗各有短●植物輪栽法●土龍を防ぐ法●泥土の肥科○蠟燭の中毒○齒ハ三面磨くべし○生髮方○鷄卵と馬鈴薯の滋養分○豆類の早煮法

雜報

●西尊東卑●米國金満家社會の二王●其職に覺る●御免下され●神智學の解釋及び目的●東京辯妄●東京養育院の究氏●覺悟は如何●彼此相羨む●白蓮女學校●大早計の人々に●東京三百年祭會●傍觀をるヿ忍びざるべし●廣嶋縣學事乃概況○近刊批評

●代價金四錢郵税壹錢

廣島縣沼田郡二篠村進德教校内

發行所　開洗會雜誌局

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

如蘭社話

九月十日發行

巻十三目錄

讃岐國雲井御所のいし文……松岡調
信濃宮御遺跡考……岩本正方
遠方人……渡邊真楫
枕草子題號說……青柳高鞆
前裁考……横井時冬
至德年間讓狀……澁谷精一郎
雄伴郡考……邨岡良弼
雄伴郡補考……栗田寛
小學一斑……澁谷啓藏
白硯の来因……小島彦七
朝鮮言語考……高橋二郎

發兌定日隔月一回十日定價一冊金十五錢五冊金六十八錢十冊金一圓十錢二十冊金二圓郵税金二錢金十錢金二十錢金四十錢郵便爲換ハ青山清吉宛ナレハ小石川郵便局吉川半七宛ナレハ芝口郵便局御注意御注文ノ節ハ●府、縣、郡、區、町、村、番地、姓名、等楷書ニテ詳細御申込ヲ要ス●御轉居ノ節ハ新舊兩所御報知ヲ乞フ●本書ハ前金ニアラサレバ逓送セズ見本ハ郵券十七錢ニテ呈スヘシ●代價ハ郵便爲換又ハ通運ニテモ御送リアリタシ郵便切手ヲ以テ代金ニ換用セラルヽトキハ一割増シナリ●前金相切レナバ直ニ逓送ヲ止ムヘシ

東京小石川區大門町二十五番地　青山清吉
東京々橋區南傳馬町一丁目十二番地　吉川半七

發行所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

● 農民之友 ハ大改良シテ題號ヲモ 實力 ト改メタリ

實力ハ偏セス黨セス專ラ實業社會ノ智力ト富力トヲ增進シ斯國本ヲシテ鞏固ナラシムルヲ以テ目的トスルモノニシテ徒ラ政治ヲ評シ時事ヲ論スル空談ノ雜誌ニ談ス

實力ハ自ラ揣テス實業社會ノ保護者卒先者ヲ以テ自ラ任スルモノナレハ其針路ニ横ハル百般ノ妨害ハ徐々ニ排除ノ策ヲ運スヘシ

實力ハ實業者ヲシテ其業ニ關スル學問上ノ智識ヲ得セシムル爲メ專門ノ学者當業ノ大家ニ托シ左ノ諸學術ヲ誌上ニ講述ス

農學諸科（其時々最要ノ科目ヲ講シ向後三年間ニ農業ニ關スル諸科ヲ講スル者トス）

商學（其時々最要ノ科ヲ講述ス）

工學（其時事最要ノ科ヲ講述ス）

實力ハ實業社會ニ往々與ル所ノ紛爭問題ヲ假設シ專門ノ法律家ニ把シテ之ヲ闡釋シ權義ノ所在ヲ明カニシ以テ紛議ヲ豫防シ若シ事アルニ至ルモ枉屈ナカラシム

實力ハ農工商ノ實業ニ關スル諸般ノ質問ニ應シ誌上ニ於テ回答スヘシ

實力ハ毎月一回（六十頁以上）發行ス定價ハ一部現金八錢○六部前金四十二錢○一年分前金八十錢○全國無逓送料○本誌ヲ一年分前金ニテ購講スルモノハ特別讀者トナシ本館臨時ノ出版物ヲ贈呈スル當種々特別ノ利益ヲ附ス

實力第五號目次

罹災者救助方案○實業者諸君ヨ　農學士米國理學士　玉利喜造
苗木仕立法　農商務技手　志岐守秋
地租論　武藏野生
日本農利ノ比較

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論談

養蠶家ノ為ニ　　理學士　佐々木忠二郎
臺樹除害法講義　　農商務技手　小野孫三郎
土壤論講義　　仝　北垣保
日本農場組織論　　仝　志岐守秋
植物生長ヲ論ス　　農學士農藝化學士　澤野淳
通俗賣買法講義　　福田又一
養蠶法講義　　與農館主人

問答

家會産卵取戻ノ請求○氣象學問答○他十數件

叢話

船津老農ノ實驗談○砂地改良法○拔株器○繭審査法○植物輪栽ノ益○清人貯卵法○支那事情○浸水米ヲ白ケル法外數件

雜録

内地雜居ト農業社會○北海道廳今後開拓策○日本ノ商業○歳入上ノ一財源○茶敵○生米ノ對求○他十數件
農夫ノ涙○官吏俸統ヲシテ悉ク報酬ノ性ニ變セシメヨ

蠶絲業改良策　一冊百頁代金十二錢郵税二錢

蠶絲ハ我國ノ經濟上至重至貴ノ者也ト雖圧内ハ則チ目前ノ浮利ニ迷ヒ斯業遠大ノ方針ヲ誤ラントスルアリ外ハ則チ伊佛支等ノ諸國或ハ其品質ノ精ヲ以テ或ハ其産額ノ多ヲ以テ我ト利權ヲ爭フ噫々蠶業ノ氣運危哉本書ノ出ル豈ニ偶然ナランヤ本書ハ河瀬秀治君。樋田魯一君。田口卯吉君。久野久君。伴直之助君。品川彌二郎君。採桑女史其他諸先生ノ蠶業改良ニ關スル高案ヲ編タルモノナレハ當業者ハ勿論苟モ經世濟時ニ志アルモノ一讀スベキ冊子ナリ

實力　一年分前金ニテ購讀スルモノハ特別讀者トナシ本書ヲ無代價ニテ呈ス

農民之友第五号ヨリ**實力**ト改題シ今後ハ廣ク發賣スルヿニ相成リタレバ新讀者ニシテ自然以前ノ發行ニカヽル講義等御入用ノ御方モ可有之ニ付キ新購讀者ノ便ヲ謀リ農民之友第一二三四號取揃代金二十八錢(郵税共)ニテ送本可仕ニ付御入用ノ御方ハ至急御申込アルベシ○金圓御送付ノ節ハ郵便爲替武州鴻巣郵便局宛取組○郵券代用ハ五分増シ

發行所 埼玉縣横見郡南吉見村 **興農館**

大賣捌所 ○東京 盛春堂 ○良明堂 ○武藏鴻巣 長島○ 其他

教育週報ハ十月初刊ノ分ヨリ紙幅ヲ縮小セリ——閲覧ニ便センガ爲メナリ。」教育週報ハ定價ヲ減ジテ一部三錢(郵税、五厘)十三部(三箇月分)前金四十五錢(郵税共)、廿六部(半箇年分)前金八十錢(郵税共)トセリ——聯讀者ノ負擔ヲ輕ウシ益〻普及ヲ圖ランガ爲メナリ。」

教育週報ハ紙幅ノ縮小ニ準ジテ稍字數ヲ減少セリ——一層材料ヲ精選シ無用不急ノ記事ヲ略シテ多忙ナル閲覧者ノ煩ヲ省カンガ爲メナリ。」

教育週報ハ最後出ノ教育雜誌ナレドモ最有力ノ教育雜誌也、其筆鋒ハ如何ナル事情ノ爲メニモ左右セラル、ヿナシ。」

發行所 東京、本郷區、上富士前町、二番地、 **教育週報社**

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

杉浦重剛序　中川重麗譯

女子之務

定價八十錢金字釘裝
美本郵税金二十二錢

右は專ら着實なる主義を執り女子の教育女子の工場職業手藝齊家保育家婦兒母の任文學音樂精神の修養美情啓發社交宴會讀書結婚處女の務眞女子の理想國民心愛國心等の事項を痛論したるものにて目下我女子教育の時弊に對し實に鍼砭藥石の價値ある文明女子の必讀書たり教科書たり請ふ一讀の榮を賜へ

神田區淡路町二丁目四番地
尚友社

大賣捌○大坂備後町石井釣三郎○京都三條寺町杉本甚助

中江篤介題○横山峰一郎譯

奇遇夢物語

洋装美本美画挿入定價
金三十錢郵税金五錢

波斯奇談本書は十八世紀政海の情波を暗に評し泰西にて有名の獨逸千一夜物語の内を譯したる者にて原著は歐米諸國讀まざるもの殆ど稀なるは其情と説破し得たるの證なり加之譯者の苦心増訂し以て一層の爽快を増したり讀者一たび繙けば再び閉るヿ能はざるの感あるべし乞ふ江湖の諸子一本を購ひ其妙味を探られんことを

東京本郷區元冨士町二番地
盛春堂

秀扳逸宕未足稱消蘐香翁鐵筆也翁之芳名自一達九重嘗服上奉刻玉璽寶妙之賞既聞天下可謂偉矣弊堂應文雅君子之囑請翁專當此業乃揭其所鐫印影以供江湖之瀏覽云爾







東京京橋區尾張町二丁目
天賞堂

朝野新聞評 ○天賞堂　尾張町二丁目なる天賞堂にては嚢に宮内省の命を奉じて畏くも御璽を奉刻したる鐵筆家金子蘐香翁を聘し專ら貴顯紳士墨客の印刻をなす由なり

時事新報評 ○蘐香翁の鐵筆　尾張町二丁目なる印刻店天賞堂は鐵筆に巧なる金子蘐香先生を聘して彫鐫に從事せしめてより文人墨客の注文増加せし由にて此程清國より李淑卿吳葆仁趙永年など云ふ文人の囑托を受け殊の外喝采を博せしよしなり

毎日新聞評 ○蘐香翁の鐵筆　曾て本紙に記載したる如く京橋區尾張町二丁目の天賞堂にては鐵筆に有名なる蘐香翁を聘してより大いに江湖の愛顧を博したりさ聞たるが今度清國より李淑卿趙永年等の囑托に應じ直ちに其の印影を刻成して送りたりと云ふ又目下清國に滯在中なる岸田吟香翁は同國風の印影を追々同家へ注文し越れたる由

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該價中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す



(金側)丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニツケル卷上げ鉾向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概畧圖の如し●府外遞送賃廿錢●(銀側)丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械フラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニツケル卷上げ鉾二番より惣石入●甲價廿一同七所金●各器械構造概畧圖の如し●府外遞送賃廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限りとす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ到底使用に堪へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價を返却すべし

● 保險の有無に拘はらず **御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品各種を發賣す

●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製(金側)十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓●(銀側)同價廿圓●同片硝子價拾五圓●

Note: the above order of the 米國製 entries follows the printed columns as follows: 米國製(金側)十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●(銀側)同價廿圓●同片硝子價拾五圓●(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製(金側)十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニツケル卷上げ鉾向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋價九十二圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同クロノカラフ引打月の滿缺十二ケ月七曜及日指し付價三百五十圓●十八金十三形(貴婦人持)無雙懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品 鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種 ● **指環** 黃金製見留印付及寶石入各種

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣せる金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比ぶれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個毎に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却とも購客の望に任するさ云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣せる時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精巧なるに一個毎に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

(遞信省認可)

明治廿二年十月十日印刷出版

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY